佐渡國

●鑛山の唄

○鶴が舞ひます鶴子の山で、お山御繁昌と舞さがる。
○是の出丁場に、三蓋小松鶴が黄金に巣を掛ける。
○東や本立、西や簾引、中の立石や皆黄金。
○臺の龜めが吹出す黄金、鶴がくはえて引あがる。
○お米は三文するお山は盛かる、枡や斗掛で金量る。
○鑿番ひ槌はあばらの毒だ、叩けや新床でも埃が立つ。
○よかれ〳〵や諸山によかれ、況て我山猶よかれ。

○門に門松、祝ひに小松、かゝる白雪や、みな黄金。

●雜謡

○來ひと言たとて往かりよか佐渡へ、佐渡は四十五里波の上。
○佐渡と越後はすぢ向ひ、橋をかけたや船橋を。
○山で木を伐る音なつかしや、殿が炭たく山だもの。
○兄樣山へ行きや茨が留める、茨留めるな日が暮れる。
○三月食はでも三年着でも、殿に着せたい紗の羽織。
○片邊鹿の浦の中の水飲むな、毒が流れる日に三度。
○眞更檀特山お瀧の水は、川の裾まで梵字が浮く。
○何たら長いさづゆ（五月雨）爺さん欠伸に黴が生た。

○海府二十四村、どれが戸地やら戸中やら。
○戸中から片邊コンヅ草鞋が夜に二そく。
○刎坂の石も殿が踏んだかなと撫でゝ見る。
○殿とのむそへか田上清水の水はうまい。
○長木矢馳の馬捨場でも、產れ在所ならなつかしや。
○眞光寺だらり（柿の名）七つ剝いたら夜が明けた。
○寺の婆名主嬶も、襷かけやれ秋三月。
○ばら〳〵と一兩欲しや、殿の番水淀むほど。
○こんこらこんとこづけ底に茶碗は何爲置かぬ。
○小泊鍬形清水飲んで死たい今一度。

○可愛い男は出判とつた、最早佐渡地の人ぢやない。

北海道

渡島國

●松前追分

○忍路、高島追びはないが、せめて歌棄、磯谷まで。
○大島小島の間行く船は、江差まはりかなつかしや。
○帶もとかちにそのまゝねむろ、落つる涙はほろいづみ。
○江差照る〳〵函館くもる、花の福山花が咲く。

●函館名物（函館）

○函館名物、すとゝことんの開拓使、滅法高いは駒ケ嶽、あねごもおばゝも。

●手毬唄（松前郡福山）

○こんにやおぢやうめこ（おぢやうめことは お嬢樣といふこと）、さぐらやのおふれこ（おふれこは お姫樣）、年もえがねにやで、長吉を連れて、長吉持た子は男の子ンなれば、江戸へ上ぼせて學問させて、江戸で一番新潟で二番、酒田三番、吉原四番、伊達男、容態女子。

●雜謠

○人の口には戸はたてられぬ、パッと噂の登別、別れの涙は幌泉。
○浪よ靜まれ、靜まれ浪よ、浪の上にはめんこい（愛すべき）人が、居るとしら浪舟を呑む。
○山鼻や屯田（山鼻村 屯田兵）色こそ黑い、腕には覺えの日本刀、あねこいかねかお宮の濱

（小樽港の北端）へ、鰊とり〳〵金儲け、ソイ〳〵。

○臥牛山から巴の港、見れば帆柱ニヨキ〳〵と、立つか帆柱ニヨキ〳〵と、ホーイ〳〵。

○可愛いお方は千島の端に、私は古丹で血の涙、ウムサイー〳〵アーウムサイウムサイ。

○樽前の山はふき出す山ではあれど、ついに笑つた顔は見ぬ、オヤそかい〳〵。

後志國

●盆踊唄

○盆の十三日ア、ほうかいする晩景だ、小豆赤飯の豆もヤー、ハアイヤサカサッサ。

○踊り見に來たか、踊りに來たか、人の名のつくまの、見に來たか。

石狩國

●方言歌（札幌）

○びる（美）しやも（日本人）も、かもの（美）もかげ（女子）を、もろして（寢して）、露の中に、ちッぷ（船）見えけり。

○びりか（我）めの子と、となせの（共に）、もころ（寢）、びしやア（雀）、ばしろ（囀）、びしこらち（天明）。

●七夕祭の唄（札幌）

○竹に短冊、七夕祭よ、オ、イヤ〳〵ヨ、蠟燭出せ〳〵よださないばかつちやくぞ。

方言ダヤとは吳レロと云ふ意、カッチアクの語はヒッカクと云ふ意なり。

●盆踊唄（同上）

○おやじなんまくだら、かゝぬすまれる、ワイワイ〳〵のキ。

十勝國

●手鞠唄

○向ふ小山に火が見える、あれは星か螢か、お提灯點て行つて見れば、猫の嫁入
鼬が媒酌、廿日鼠が五升樽さげて、裏の細道チョコ〳〵走る。
○咲けよ開けよ眞垣の苫、お前何時でも朝々起きて、人の見ぬ間にお白粉紅を、
身ごしらひさへ美ごとに仕揚げ、露を含んで匂へる樣は、梅や櫻にまさるぞや。
○蓮華や〳〵、イチョ蓮華、蓮華に實も無く花も無く、今日か明日だか、又イチ
ョか、またイチョなんぞの女房は、泣いても笑ても物言はず、物云ずばは尤ぢや、や
つつの紅、金つけさして、とうに着物をやつたれば、着物の帶しめ日が暮れて、

さア今夜は何所へ泊らうか、お寺へ泊ッてけしかつて、醫者とまつてかと見れば、
十七八の御女郎が、黄金の盃持出して、一杯あがれやお客樣、三杯目にはながし
の權兵衛さんが、魚が無いとお腹が立ちました。
○かしや、かねざもの、しんたてまつる、少しあがれば八百屋がござる、八百屋
隣に櫛屋がござる、櫛屋隣に桶屋がござる、桶屋隣に米屋がござる、米屋娘はよい
子でござる、京で一番、大阪で二番、さかや三番、吉野で四番、ところ五番の姉
さんなれど、下に白無垢、上には綸子、綸子緋綸子、白茶の帶、髪を結言て島田
に結て、ごきんぼーしよをひろりと卷いて、銀の簪、おとしにさいて、瀬戸の川
瀬の水車、ずい〳〵と、ずいと〳〵。
○三次郎や、〳〵、長い刀が差したけりや、此向への、木の枝、おろいて葉も

いで、木挽大工に造らせて、木挽大工が厭ならば、漆珊瑚で光らして、油珊瑚でのりこして、馬の馬場へ馬攻めに、牛の番場へ牛攻めに、馬の攻様も宜ござる、牛の攻様も宜ござる、高い處が七處、低い處が七處、高い處で胸ついて、低い處で足ついて、此處がしよごで、しのならば、乘物のりかけ伯父さんに、あと脇差は兄さんに、櫛笄姉さんに、男共には錢五百圓、〳〵。

●盆踊及勞働唄

○どんな男に、どんすの羽織、着せて眺めりやなほ鈍な。
○可愛らしいはいんど(豆蔻)の花よ、花は小花でノー濃紫。
○下い(へ)〳〵と枯木を流す、流す枯木にノー花が咲く。
○東はたて山、地獄だん(谷)、西は西方のあー阿彌陀樣、雲がかゝれば、おー拜

がまれて、雲が邪見で無けれども、吾身が邪見ので、おー拜まれん。
○惚れる、迷ようと、髪の毛迄も、入れたかもじの中までも。
○來いよ〳〵と言て鳴く鳥は、山の法華經か、熊鳥か。

●子守唄

○ねん〳〵猫の尻、蟹や這込んだ、ヤットコスットコほじくり出したら又這ひ込んだ。
○ねんねの寢た間に何せよいの、小豆餅の、橡もちや、赤い山へ持つて行けば赤い鳥がつゝく、青い山へ持つて行けば青い鳥がつゝく、白い山へ持つて行けば白い鳥がつゝく。

釧路國

●鴉どん〳〵

○鴉どん〳〵、何所へ往くね、柳の下へ胡麻蒔きに、何升何合蒔いて來た、三升三合蒔いて來た、誰に呉れると蒔いて來た、お前さんに呉れると蒔いて來た、お前さんが十四になつたなら、鐵漿着けて紅つけて、京の濱迄送らせる。

●忍路歌棄

○忍路歌棄便が遲い、せめて苫前增毛まで。

●北海道の鮭魚

○ヤンショイサ、イヤヨイサ、エーヤサドッコイヨイサ、エーヤサ。

是は擢をかく時の謠なり

又天氣晴にして、浪穩かなる時は

○ヤーサノエー、シユッ、ヤサソーラーエー、シユッ、ヤ、ノナー、ヤサホーイ

是を何度も繰り返へして云ひ、其間に水を打ち、或は擢を以て船端を打つなり、是と同じ節にこんなこともいふ。

○屋は神樣でー、親方神主だー、ヤサホーイ。

○かんび、おかんびでー、船頭は泥棒だねー、ヤサホーイ。

濱へ近つき、船首を向して、後擢をかく時には

○ヨーサー、ヤシンエー〳〵〳〵。

と音頭なしに一齊に唱ふ。

又沖掲の時の囃子は

○アーソーラン〳〵〳〵したきやさせましよ七つも八つも、一つ二つは穴よ
ごしチョイ、エーリヤンサードッコイショ、アラドッコイショ〳〵〳〵。
○アーソーラン〳〵〳〵してもしたがる爺様と婆様、今朝もしました寺參り
チョイエーリヤンサードッコイショアラドッコイショ〳〵〳〵。
○アーソーラン〳〵〳〵□のかはらけ烏がつゝく、親爺や泣く〳〵石投げる
チョイエーリヤンサー、ドッコイショ、アラドッコイショ〳〵〳〵。

山陰道

丹波國

●福知山

○福知山出て長田の野出て、駒を早めて亀山へ。

●盆唄

○丹波田所、良い米所、娘遣りたや婿欲しや。
○與作丹波の馬追ひなれど、今はお江戸の刀差。
○與作思へば照る日も曇る、關のこまんが涙の雨か。

○丹波雪國積らぬ先に、連れておでやれ薄雪に。

●田植唄

○雪になりたや愛宕の雪に、解けて流れて清瀧の、都女郎衆の化粧の水。

○伊勢は萱茸、愛宕は檜皮、能勢の妙見さんは金瓦。

●雜謠

○花が蝶々か、蝶が花か、雪はチラ〳〵迷はかす。

○よい衆餅や搗く、餅や搗かぬ、貧乏餅やつく餅や搗かぬ。

○酒は酒屋で飲んでは來たが、娘烟草の火を貸しやれ。

○お伊勢參りがしたいわいな、殿とつれだち宮巡り。

○君に添はふか五千石取ろか、何の五千石君と添ふ。

○あたま茶瓶でも片鬚のでも、倉にお米のあるがよい。

丹後國

●田植唄

○出の町に植ゑたるイヤア、早稲は何早稲とよな。
○何早稲には指一つの早稲で、倉の一ずみとよな。
○日の暮れに濱田を植ゑりや、千鳥啼くとよな。
○千鳥啼け、も一つ啼け千鳥、聲くらべよとな。
○こうりよく衆はお畫をまちやる、舟方は帆柱を立てる風を待つとよな。

●臼挽唄

○天窓しめ忘れて南無三寶、こう神松にと積る雪。

●獵師唄

○殿の御商賣獵人でござる、鐵砲當世のはかねづゝ、かたすりうちぬき菊の紋、腰には腰筒やまがしらう。
○高山やまへかゝる時、猪猿狼覺悟なり、先には白犬後に黑、火縄の火でも消えぬ樣に、思ふて呉れるは妻ばかり。

●丹後の宮津

○逢ふて嬉れしや別のつらさ、逢うて別れがなけりやよい、丹後の宮津でぴんと出した。
○惚れてつまらぬ他國の人に、末は鴉のなき別れ、丹後の宮津でぴんと出した。

●二度と行くまい

○二度と行くまい丹後の宮津、縞の財布はだんぜん空となる、丹後の縮緬加賀の絹、仙臺平では南部縞、陸奥の米澤江戸心、丹後の宮津でピョンと出した。

但馬國

●盆踊唄

○都々と私連れて來て、此所が都か山中を。
○雨は降るとも身は濡りやせまい、樣の情けを笠に着て。
○親は子といふて尋ねもするが、親を尋ぬる子は稀な。

●同（豐岡）

○やアーちやアゝゝゝャア、なーらいたアか、九日のかアにやアなージャアルヤーちやーア、は九日がちよでごーヲ、ざアるーよ。
○盆のお月さんはまんまる、こでまるで、まるでまんまるこでまたまるい。

○豐岡しもに出て二見の清水、呑んで氣もやすゞやかで。
○豐岡大橋や流りよが落ちよが、湯島通ひは舟でする。
○をどり氣狂ひ見るあほたれよ、去んで寢る奴ア、やさいもち。
○トロリトントロリとやアれ出た戀なれど、今は出もせぬ聲までが。

●子守唄

○ねん〳〵山の兎はなぜに耳が長いや〳〵生れた時に父親が耳を啣へて振ッたげな〳〵。
○うちのトンコはねんねが好きで、いつもねんねがはよ御座る。
○好い子じや泣くなよねんねんや、泣くと鷹がつかむぞ。
○ねんねする子にや赤い衣着せて、起きて泣く子にや縞の衣、縞の衣。

●雜謠

○ちらと見初めた、あの程のよさ、霞がくれの薄櫻。
○肱を枕に寢てから崎の、松にゆかしき春の雨。
○ひさごくずやに蚊遣を焚きて、綾や錦と夕涼み。
○岩の清水は底から湧くが、樣の心も底からか。

因幡國

●手鞠唄（鳥取市）

○向ふ通るはお萬でないか、お千でないが、行て見て來い、おせんでござる、お千こりや〳〵何故髪とかぬ、何が嬉れしかて髪ときましよに、一人父さん冥土に行きやる、一人母さん大阪に行きやる、可愛い兄さん出雲に行きやる、出雲土産に何々貰ろた、櫛に笄八寸鏡、紬七尺是れ貰ろた、もろは貰うたが、帶にや短かし襷にや長し、絎けてしそめて山田にあげて、山田藥師の鐘の緒に。

○夏年から冬年から、己れの大切のお手鞠さんを、紅の伏紗にお包みまをして、向ふのお何女郎の、お手の掌に確々とお渡しました、おいこに受取りました。

○向ふ通るは誰が娘、問屋八兵衛の少娘、音に聞えた器用な子ぢや、器用に育てた子ぢや程に、親に千貫子に五貫、締てお駕籠に四十五貫、四十五貫のお金は何うした、安い米買てお船に積んだ、船は何船都船、都戻りに何貰らうた、金襴緞子の帶貰ろた、帶はもろたがまだ絎けぬ、絎けて下さいおばこはん、絎けて遣りたいものぢやもの、帶にや短かし襷にや長し、いまぞ約せぬかねの綱、かねの綱

○けん〳〵京橋はッとーのお前女房はよい女房、私にも水仙牡丹女郎、牡丹女郎

○阿波の十郎兵衛さん十郎兵衛さん、一文きなかであわゝが鳴るかいな、あゝなるわいな、鳴れば一つして見んさいな、あゝせうやいなアワ、一ッアワ、二ッアワ、三ッアワ、四ッアワ、五ッアワ、六ッアワ、七ッアワ、八ッアワ、九ッアワ、十ヲ。

○とん〳〵父は德利、母は燗鍋、酒を飲むとて、酒の肴に鯣買うて來て、棚に置たら、猫に捉られて、猫をぼうとて、石にけつばなづいて、スットントン。

●兒童の隱れんぼ唄（鳥取市）

○いーちこたーちこたーえんこ中見りやしーんがわく三つこーじよーろの罪の先さはぷい。

○炭屋の鼠が炭食つてちこーおーせに成つてもおこりこなーし。

○いつぽてつぽ何食ふ蠶豆かね粒おちまんがとんぐりまいてみよーかにさんしよ

○雀の寄り合ひちゆーちゆーばいばい鬼になつてもおこるなよーおこらば初めによらんがえー。

●動物唄（同上）

○雁なれ、竿なれ、先の雁後になれ、後の雁先になれ。

○螢、ほーたろ、來い〳〵〳〵、あつちの水は苦いぞこつちの水は甘いぞ。

蝸蝸を捉ふる時に同じ

○でん〳〵でんの蟲、出たり、入たり、シヤーらんな。

○あさまよりのこんからすが、露にしよぼ濡れたやうな、から〳〵と、苗を取る露に濡れたよな。

○烏々こーめんどよ、後を見先を見、鐵砲打ちが來よる、早くいんでこへを掛けどん。

○烏の眞似をしたけれど、三年先に帳に付けて戻いた。

●雪の唄（同上）

○雪や來い〳〵霰や來い來い、大山やまの雪ころころや。

●お月さん何ぼ　（同上）

○御月さんは何ぼ、十三七つ、七折り着せまして京の町に出いたら、鼻紙落し、笄落し、誰が拾つたか、向ふの家の息子が拾つた、笑つても呉れず、泣いても呉れず、とーとー呉れなんだ。

●岩井温泉場唄　（吉岡）

○初まる〳〵、三ッつに四ッつは、五つでも六ッつ、七んな八ァつは、初のお豐、お豐はよい子で、三つに四つは、五つでも六つ。

○おさへたへさへた朝鮮和蘭陀、内のかゝねらんだ、東が白らんだ起て見なんせ、朝日がさします、七んな八ァつと二度目のお豐、お豐よい子で。

伯耆國

●田植唄　（日野郡黒坂）

○朝起て、アーレ、ほゝ戸を開けて見渡せば、アーレ黄金に優る朝日さす。

○晝間米つきやるアーラ、十二殼臼、嫁御さまも出てマージやる、十二殼臼、出てマージやる。

○惚た振りすりや、眞實に受けて、死んで盡すがワシャをかしい。

●手鞠唄　（米子）

一つとせ、拐杓に笈摺杖に笠、順禮姿で父母を、尋ぬる哩の。

二つとせ、彌陀落紀州は三熊野の、那智山御山の音高い、響く哩の。

三つとせ、見るよりお弓は馳せ寄りて、小盃に白金寸志、進上哩の。
四つとせ、愈々順禮をなさんすか、定めて連衆は親子達、同行哩の。
五つとせ、何時迄で私も一人旅、父さんや母さんの顔知らぬ、會ひたい哩の。
六つとせ、無理を押へてとう〳〵に、少々ばかりの賸に、進上哩の。
七つとせ、泣く子を抱いたり賺いたり、其子の親衆の心には、可愛哩の。
八つとせ、山里海河觀念の、めぐり會ふたり會はれやうかいな、逢はれん哩の。
九つとせ、九つ順禮の手を引いて、十郎兵衞館の玄關口、はいらう哩の。
十とせ、遠々たづねて來たものを、我子と知れたら殺しやせぬ、可愛哩の。
十一とせ、住居地細々聞き取れば、生れは阿波の德島と、なのる哩の。
十二とせ、十二の炬燒に寢せ置いて、絞りの手拭で絞め殺す、可哀哩の。

○向ふ通るは武内さんか、羅紗の羽織に天鵞絨の脚袢、鐵砲擔いで雉撃ちなさる
雉はケン〳〵お鳩はバタ〳〵、藪の雀はスイトントンヤットントン。
○一イ二ウ三イ四、五ッ六ウ七八ア、これでこゝいつ、二三さぶ六花の都で落す
か放すか一寸有ついた。

●雜謠

○大山お山の二股椿、枝はひめ路に、葉は日野川に、花は米子の城で咲く。
○大山お山から隱岐の國見れば、島が四つに大滿寺、東日がたから朝日射す、西
にや五色の雲が立つ。
○三上山から沖を見れば、三味線の樣なる帆を懸けてヨサヨ〳〵で上のぼる。
○安來千軒、名の出たところ、社日櫻に十神山。

○關の五本松一本伐りや四本、あとは伐られぬ夫婦松。

出雲國

●天氣天象の唄

○大山の山から大風吹いて來いよ。

○雪やこんこや、霰やこんこ、お前の背戸で、團子も煮える、小豆も煮える、山人に戻る、赤子にほへる、杓子は見えず、やれいそがしや。

●私は雲州平田の生れ

○わすはうんすう、ふらたのおなれ、ずうり二ずうりさんずり、にしのはてからふぶしのはてまで、ふくずりふつばり、いまさらふをとはふらつなふとだよ、ふろいせかいにのしふとりがをとこでない。

私しは雲州平田の生れ、十里二十里三十里、西の端から東の端迄、引ずり引張り、今更厭やとは不埒な人だよ、廣い世界に主一人が男でない

●亥の子祭

○亥の子さんの晩に祝はぬ者は、蛇生め、子生め、角のはえた子を生め。

●駄賃馬が屁こいた

○駄賃馬が屁こいた、なんぼこいた、十をこいた、十の山え聞へて、松が二本ころんだ、助かあて起いた。

●手鞠唄（松江）

○おほまんぐちぐち、あげやのまいまで、よをしたかさんとよさん、ひめさんたんだが、しまのえきさき、さーの花めごさん、せんせんとんとん、やつとんとん

なら、ちよいと、ひらさい、おちえて、おゝまんぐー。

○向ふの山に、猿が三匹止まつて、前の猿は物識らず、後の猿も物識らず、中の子猿が能う物識つて、ござれ友達、花見に行こや、花は何處花、地藏の前の櫻花一枝折ればパッと散る、二枝折ればパッと散る、三枝がさきに日が暮れて、何方の紺屋へ宿取ろか、東の紺屋へ宿取ろか、南の紺屋へ宿取ろか、殿さんの紺屋へ宿取つて、盤は短し夜は長し、曉起きて空見たら、ぎつこのばつこのきいせんご船ども渫へて帆を掛けつ、帆掛船の吊り物は、白織、赤織、赤地の交つた鍔刀。

○やれ腹が立つ、立つならば、硯と筆とを手に持つて、思ふとをば書き置いて、紫川へ身を投げた、下から雑魚かつゝくやら、上から鴉がつゝくやら、つゝいた鴉は何處へ行た、森木の下へ麥蒔きに、何石何石蒔いて來た、二千石蒔いて來

た、二千石の能には、寺の前で子を産んだ、住持の衣へ血がついて、雨垂水で洗つて、香爐の火で炙つて、香爐の火が足らいで、油火で炙つて、油火が足らいで竈の火で炙つて、竈の火が足らいで、炬燵の火で炙つて。

○猫が桑名へまゐるとて、桑名の道で火が消えて、とぼしても、とぼしても、とぼらいで、茶屋の椽へと腰かけて、水を一パイお呉れんか、水を與るのは易いけど、釣瓶の底が抜けました、やれ〳〵きつい姉さんぢや、お茶を一ぷくお呉れんか、お茶を與るのは易いけど、茶釜の底が抜けました、やれ〳〵きつい姉さんぢや、煙草を一服お呉れんか、煙草を與るのは易いけど、煙管の首が抜けました、やれ〳〵きつい姉さんぢや、ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なゝ、やわこの、とう。

○向ふの小澤に蛇が立つて、八幡長者の末娘、巧くも立つたり企んだり、手には二ほんの球を持ち、足には黄金の靴を穿き、あゝ呼べ、かう呼べ、と言ひながら山くれ野くれ行つたれば、草刈殿御に行きあつて、帶を下され殿御さま、帶も笠も易い事、己の女房になるならば、朝は起きて髪結ふて、花の咲くまで寢て待ちよ。

●子守唄

○ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや、ねたらお母へ連れて行なあ、起きたらかゝまがとつて嚙まあ。

○ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや、彼方向いても、やあま山、此方向いてもやあま山、やあまの中に何がある、椎や鈍栗榧の實。

○寢んねこせい、寢んねこせ、寢んねのお守は何處へ行た、山を越へて郷へ行た郷の土産に何もろた、でん〳〵太鼓に古つゞみ、おきあがりこぼしに犬張子。

○ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや、此の子何故して泣くやら、お乳が足らぬかお飯が足らぬか、今にお父さんの大殿のお歸りに、飴や、お菓子や、ピイ〳〵ヤ、ガラ〳〵、なぐればフイと立つ、おきあがりこぼし、ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。

○お寢んね、お寢んね、お寢んねや、宵には早から御寢なり、あさまは早からお目覺で、御目覺のお褒美はなあに何、お乳の出花を上げましよぞ、お乳のではながお嫌なら、鷄蹴合せてお目にかきよ、鷄蹴合せおいやなら、お菓子は澤山おあがりか。

●遊戯唄

○地藏さん、地藏さん、おまへの水を、どんどと汲んで、松葉に入れて、まッくりかへた。

○こな子よい子だ、何所の子だ、問屋八兵衛の末娘、なんと好い子だ、器用な子だ、機巧にそたつて來たほどに、親に十貫、子に五貫、せめておばゞに四十五貫四十五貫のお金を何にする、廉い米買ふて船に積み、船は白金艪は黄金、さあさ押せ押せ都まで、都もどりに何もろた、一に笄二に鏡、三に更紗の帶もろた、紵けてくだされおばゞさん、くけう〳〵と思へども、帶に短し襷に長し、山田藥師の鐘の緒に。

○向ふの山のかはづが、啼くが。なして啼くか、寒うて啼くか、ひもじて啼くか

ひもじさや田つくれ、田つくりやきたない、きたなさや洗へ、洗やつめたい、つめたさや暖れ、あたりや熱い、あつけや退れ、しざりや蚤が食ふ、蚤が食や殺せ、殺ろしや可哀い、可愛いさや抱いて寝、抱いて寝りや蚤が食ふ、蚤が食や殺せ。

●赤い帷子

○ひるまもちのござるやう、赤い帷子で、ぶらりしやりと、赤いかたびらで。

●千家きたしな

○千家きたしなにやあ焼餅が流行る、中に味噌入れて、ぼつぼはや〳〵と。

●さんなれ様

○さんなれみれの嫁御様、何所な育ちのさんなれ様ぞ、稲の裏穂の軒育ち。

●動物の唄

○鳶、とび、舞ふて見せ、あしたの晩に、鴉にかくして鼠遣る。

○蝙蝠來い、酒飲ましよ、酒が無きや、樽振らしよ。

○螢來い、水飲ましよ、あつちの水は苦いぞ。こつちの水は甘いぞ、甘い方へ飛んで來い。

○跡の烏先になれ、我家が焼ける、早よいんで水かけろ、水がなけりや貸そゞ、除つたら、返へよ。

●雑謡（松江）

○やま、やあーま、やあま、やま、山々越えて、河こえて、さあとゆき、さとの土産に、なにもろた、でん〳〵太鼓に笙の笛、とーと。

○みた、みいいた、みた。みた、みたやの、おかつさんが、どうらくで、えづみ

やどんべさんが、わしやちや見たども、いはぬこと、とーと。
○ほーらん、ええええ、えやさのさつさー、いのらのらん、ほををらんんや。
○あまけたか、まけたか、□□町は、なしてでぬか、□□してでぬか。

石見國

●盆踊唄

○關の地藏に振袖着せて、奈良の大佛婿に娶る。
○京の大佛で墻持たせ、鯨釣りたい五島浦で。

●羽子突唄

○一ごに二ご、みわたしや嫁御、いつやに武藏、何のおやくし、爰の十十一十二
……。

●手鞠唄

○十貸した、二十貸した、三十貸した、四十貸した、五十貸した、六十貸した、

七十貸した、八十貸した、九十貸した、一貫貸した。

○十ないた、二十ないた、　……皆扣い、拾貸した。

○十負せ、二十負せ、三十負せ……。

○向ひ坊さん椽から見れば、梅か櫻か牡丹の花か、行けば能ふ來た上れと仰有る上りやお茶召せおすべの莨、お茶も莨も所望ぢやないが、今朝見た女郎衆は髪が亂れて鬢かそゝけて一寸百ついた。

○源さん〳〵花源さん、私が十五になる時にや、城山崩いて宮建てゝ、宮のお庭に松植ゑて、松の小枝に鈴下げて、鈴がチン〳〵鳴るわいな。

○人形さん〳〵お起なれ、起きて髪結ふて顔洗ふて、前の權現さんへ詣らふや、詣て涼んで腰掛けて、人形さんのお顔に血が付いて、血ではないわへ紅だわへ、

紅なら私にも付けとくれ、此處にはないわい家にある、爰から家迄何里ある、往きし戻しで三百里〳〵。

○お仙來い〳〵物言ふて聞かしよ、其方が家の婆さんは燒餅が好きで、晩に九つお食に七つ、朝の茶の子に三つ足らぬ〳〵。

○十町八町の惣が、今年初めて伊勢詣り、伊勢程廣い處はない、一夜の宿を借り兼ねて、梅の木小枝に宿取りて、花を枕に葉を夜具に、假寢の夢に何と見た、昨夜御座つた花嫁御、今朝の座敷に直られて、錦襴緞子を縫はしやんす、莚三枚莚三枚、六枚屏風を立て詰めてホロリホロリと泣かしやんす、なにが不足で泣かしやんす、何にも不足はなけれでも、妾が弟の千松が七つ八つから金山に、金を掘るやら死んだやら、一年待てども戻らない、二年待てども戻らんが、三年振り

の正月に、お糸に來い迎狀が來た、お糸はやらぬ妾が行く、妾が行くには金がいる、親に十貫子に五貫、死んだ叔母御に四十四貫、四十四貫の錢金で、高い米買ふて船に積む、安い豆買ふて船に積む、船は白銀艫は黃金、サーサ押せ〳〵都迄、船は何處船都船、都土產に何貰ふた、一に笄二に鏡、三に更紗の帶貰ふた、帶にや短し襷にや長し、太田藥師の鐘の釣緒にや嘸よかろ、太田藥師もいらんと仰有る、久手の藥師もいらんと仰有る。今度生れた赤子の紐〳〵。

○向ふ通るは與一兵衞ぢやないか、鐵砲かついで小脇差を差いて、向のお山に雉打をじやる、雉はケン〳〵小松の下で、卵取られてホロ〳〵鳴く〳〵。

○こんなお初や髮なと結やれ、櫛がないかや油がないか櫛も油も掛子にあるが今年甫めて腹に子が出來て、產まうか下ろそか殿御に問へば、產まば產め〳〵下ろ

させやせねど、產んだ其子が女の子なら、菰へ包んで小繩でゝめて、前の小川へポチャンと投げる、生れ替つて男の子なら、大小差さして社祢着せて、寺へさし上げ手習させる、寺の和尙さんが意地惡和尙で、寺の椽から突き落されて、二十匁三十匁の鼻紙捨てゝ、誰が拾ふたと詮議をすれば、妾は拾はぬお千が拾た、お千出せ〳〵お万が拾ふた。お万出せ〳〵出さねば聞かぬ、私は何にしよにや川へ取て投げた、うんでつむいで七子に織て、京で晒いで大阪で染めて、廣い廣島で紐買ふて附けて、いとし殿御の夏羽織。

○こんな(此所)おかるや、髮でも、とけやれ、櫛が無いかや、油がないかや、櫛も油も、かけごに御座る、去年のこの頃、腹に子が出來て、產まうかおろそか、殿御に問へば、うめば產め產め、おろさしやせんけ(の儘)、もしもてんねん(萬一

ふこ)男の子なら、寺へ差上げて學問させて、寺の和尚さんは短氣な人で、寺の門からつき落されて、二十目三十目の鼻紙すてゝ、誰が拾ふたと詮議をすれば、大阪戻りのおすぎが拾た、おすぎ出せ出せ、おまんにやつた、おまん何しようと川へとつて拋げた、川に流れる、おすじが拾ふて、京でするいて大阪で染めて、廣い廣島で、紐買ふて付けて、これの旦那さんの夏羽織、夏羽織。

○今日は朔日奥へ招ばれて、鯛の濱燒、蛤吸物、一膳振りのおす吸の吸物、スゝ。

此時には口へ手を當てゝ二膳三膳と次第につき進む。

○今日は少々明日は大々、大事なお手鞠樣を、蝶よ花よと育てゝ置いて、四十四枚のお紙に包んで密柑くゞしにくゞしまねいて、今日今晩雨は降らばや風は吹か

ばや、お松樣よりお竹樣迄、確に〳〵進上申すへ、そりや取んなされ(と次の人に渡す次の人は受取る)お竹樣にはお松樣より確に〳〵受取りなした(とて又前の歌を繰り返し又次の人の名を呼びて循環す)

○張合御座れ、そりや御座れ、負けたら恥の大恥よ、云々。(總人數一時に突きあひつゝ其長く續くを勝とす)

○壁つき御座れ、そりや御座れ……(壁に向てつきつゝ長きを競ふもの也)

○いもせん小せん十六せんで一丁ない。

●

一バタカヤ、シーカヤ、わしや一やきらぬ(一切るとは順番を定むること)、小供衆こそ一切るもんだよナ。

二バタカヤ、シーカヤ、わしや庭掃かぬ、をなご衆(婦人を稱す)こそ庭掃くもんだよナ。

三バタカヤ、シーカヤ、わしや酒賣らぬ、酒屋の衆こそ酒賣るもんだよナ。
四バタカヤ、シーカヤ、わしや猪や擊たぬ、殺生人こそ猪擊つ、もんだよナ。
五バタカヤ、シーカヤ、わしや碁は打たぬ、親方（此地方にて資産家をいふ）衆こそ碁を打つもんだよナ。
六バタカヤ、シーカヤ、わしや櫓は漕がぬ、船頭さんこそ櫓を漕ぐ、もんだよナ。
七バタカヤ、シーカヤ、わしや質やおかぬ、貧乏人こそ質置くもんだよナ。
八バタカヤ、シーカヤ、わしや機織らぬ、女子衆こそ機織るもんだよナ。
九バタカヤ、シカーヤ、わしや、くぢくらぬ（我儘を言張ること）小供衆こそくぢくる、もんだよナ。

十バタカヤ、シーカヤ、わしや字は書かぬ、てならひ衆こそ字を書くもんだよナ。

●子守唄

○お月さんなんぼ十三九ッ、そりやまだ若いな、油買ふて上げようか、燈心買ふて上げやうか、油もぜんぜ、燈心も錢、ぜんぜの中で、子一人設けて、お萬に抱せうか、お千に抱かせうか、お千もお萬も芋掘り往つて、芋の蟲に嚙れて遂死んだ。

○向ふの山の松の木に、猿が三疋止つて、先の猿は物知らず、後の猿も物知らず一の中の小猿奴が大物識で物知りで、何と友達花折り往かう、花は何處花地藏の前の櫻花、一枝折ればパット散る、二枝折ればパット散る、三枝が迫て日が暮れ

て、前の紺屋へ宿取ろか、後の紺屋へ宿取ろか、中の紺屋へ宿取つて、疊は狹し、夜は長し、曉起きて空見れば蓮華の樣な化粧して上から烏がつゝくなり下から地藏がつゝくなり。

●遊戯唄

○宿料幾程、十二の旅籠、安うして給へ、安うない高からない、どんどと通れ、エッサ〳〵、昨夜の錢お呉れ、跡の子を取ておくれ。

○三月櫻獨樂、四月しーら(小)獨樂。

○今日は十五日、尻が一杯見たいな。

●天氣天象の唄

○お晩が紅さいた、とゝかゝに云ふてやる。

○雪やこんこ、霰やこんこ。

●盆唄

○踊り子を出しやれ。

●亥の子唄

○亥の子さんの晩に、祝はぬ者は、鬼を産め蛇ア産め、角の生へた子を産め。

●動物の唄

○跡の烏先に立て、我が家が燒けるけ、杓一本買ふちやるけ、早やう往んで水う掛け。

○ホータロポッポ、下い降りいポーポ、上の水は苦いぞ、下の水あ甘いぞ、螢ポーポ。

○もい〳〵角出せ、燒いて嚙も。
○蛙の目玉に針立てゝ、とこ飛ばりよか飛んでみな、ピヨコ〳〵〳〵ピヨツコピヨツコ。
○我が指は糞指、私が指は金指、なんぼ嚙んでも痛ふない。
○此山に長蟲居らば、山田の姫に逢ふて談らしよ。

●雜謠

○宜い女房小女房、鼻がチツクリ高いは、大工呼んで削らしよ。
○あんな子は何所の子、在郷の野暮の子、煮ても燒いても食はれぬ子人。
○在郷の野暮が、肴を買ひに、出た事ア出たが、肴が無いで、狼汁に猫鮗。
○盜人龕燈が寺の前を通りヤ、弓う以て打ち殺せ。

●回謠

○タ、狸の□□八疊敷、キ、狐の□□團子にしよ、しよ〳〵正直賣買へこなつたタ、。
○リ、李鴻章の禿頭、マ、滿洲兵を打取つて、テ、帝國萬歲大勝利、リ、。
○キ、木下藤吉秀吉は、ワ、我國一の豪傑ぞ、ゾヽ草履の許から出世して、テ、天下の將も是れ一朝、チヨチヨ朝鮮征伐太閤記、キ、。

隱岐國

●盆唄

○我は奥山の笹小笹、藤に卷かれて寢とござる。
○いなしよ〳〵と思ふたうちに、太郎が生れて往なされぬ。

●雜謠

○思ふて通へば千里が濱も、障子一重と思ふて來る。
○心通はす杓子の先まで、言はず語らず目で知らす。
○脊を叩かれ、しんこほどはれた、これも悋氣の固まりか。

山陽道

播磨國

●盆踊唄

○いつか鴻の池の米踏みしまひ、播磨灘をば唄で遣ろ。
○池田伊丹の上諸白も、錢が無ければ見て通る。
○髮を島田に結はうよりお方、心しまだに持ちなされ。

●亥猪祭　（印南郡曾根）

亥の子舁き行く時の囃言葉

○いんのころ、あしたのようさもちつこん、餅搗かんえゝソ、鬼うめ蛇生め、角の生へたア子産め、子産まないやいとしよう、のころ。

亥の子餅搗く時の囃言葉

○こんの裏のちさの木に、雀が三疋とうまつて、一羽の雀がいふことにや、爺さん婆さん、せかんすな、私がじろくになつたらば、しろやまくづして宮たてゝ、宮のぐるりに松植ゑて、松の小枝に鷹据ゑて、鷹のねもとに鈴さげて、鈴のちん〳〵鳴る音は、鶴か龜かうのどりかえーとなえーとなしよもんつきやえいとな、のころ、あしたのようさ餅搗こん。

●どんくがとぶなら（室津）

○コリヤ〳〵〳〵、どんくがとぶなら桶かぶせ、それでもとぶなら杵おけ〳〵

コリヤ〳〵〳〵、なんぢゃいな。

●伊達の薄着で

○伊達の薄着でお風邪を召すな、様は播州の湯にござる。

●うたへ〳〵と

○謡へ〳〵とせりたてられて、謡ひあげます高砂へ。

●花の敦盛

○花の敦盛十六歳で、玉織姫を後にして、急がせ給ふは須磨の浦。

●手鞠唄（姫路）

○あれ見いやれ、向ふ見やれ、屏風たあてゝ、すごーろく、双六に五番負けて二度と打まい鎌倉、鎌倉に參る道に椿一本育てゝ日が照れは涼み處、雨が降ればや

め所(やめ所とは休み所の訛ならん)此やめ所に降込められて、お茶もいや〳〵煙草もいや〳〵ちよんがーいな。

○ちよんがり祖母さん、今年九十九で熊野へ嫁入しよと仰しやつて、白髪三筋にたけなが掛けて、奥歯二枚に紅鐵漿附けて山を通れば薔薇が止める、河を通れば洗濯者が止める、寺を通れば手習子が止める、手習子そなにすな(そなにすなとは其様にするなと云ふこと)日が暮れる、ちよんがーいな。

●山陽鐵道(明治廿六年頃流行)

○山陽鐵道の始まりは、兵庫にて、其名も優しき柳原、アレなびくは須磨の鹽煙

○ゆうべ舞子と添ひ寝して、夜を明日、今朝の別れの戀しさに、アレ大久保驛を後に見る。

○土山越えて加古川の、薬師如來さんを伏し拜み、アレおてゝあはして阿彌陀驛

○かもがた藝妓は親切な、雨霰霙の降らんのに笠岡す、アレ横根の福山で。

美作國

●盆踊唄

○又と行くまい湯原の湯へは、三坂三里が憂い程に。
○今年や豊年穂に穂が咲いて、道の小草に金が生る。
○前田の稲の葉持のよさは、黄金の露を卷き上げる。
○派手な金屋の金五郎は、このて柏の裏表。

●手鞠唄（津山）

○向ふ通るはお伊勢道者か熊野道者か、肩にかけたる帷子、肩と裙とは梅の折枝
中は薄茶で染め分けの〳〵、ちよつきりこつきり小女房は、何處で打たれた東海

道でうたせた、一ッでは乳をのみ初め、二ッでは乳口にはなれて、三ッでは水を吸ひ初め、四ッでは用をきゝ初め、五ッでは糸を捻り初め、六ッではむか機織り初め、七ッでは綾や錦を織り初め、九ッでは此所の紺屋へ嫁入りし初めて、ナヲでは殿御に添ひ初めて、十一では玉の様なる子供持ち初め、世話をするのが十ッとん〳〵。

○向ふの小寺は誰が建つた、八幡長者の乙娘、乙はよい子ぢや清の子ぢや、清で育てた子ぢやものに、木綿着せまい紬きせて、紬が可嫌なら、せつきには、せん〳〵雪駄を買ふてやろ、せんせん雪駄が可嫌なれば、金打ち雪駄を買ふてやろ、金打雪駄が可嫌なれば、昨夜つむいだ綿帽子、お馬の上から打かけて、後の姿がよいけれど、前の小褄に血がついて、血ではない〳〵夕〳〵化粧けはいの紅だつ

た、そりやすかとん〳〵。

○鶯が、鶯が始めて、都へ上る時、梅の小枝へ畫寢して、春咲く花を夢に見て、雨も降らんのに、風も吹かんのに、地獄山から水が出て來て、お萬小袖を流した、流す程なら水と云ふ字を書いて流せと仰せ付け〳〵。

備前國

●盆唄

○備前岡山新太郎樣の、江戸へ御座れば雨が降る、雨ぢやござらぬ十七八の、戀の涙が雨となる。

○御油や赤坂吉田がなけりや、なんのよしみに江戸通ひ。

○君に逢うとて朝水汲めば、濁る心かまだ逢はぬ。

●岡山育ち

○私や備前の岡山育ち、米の生る木はまだ知らぬ。

●子守唄（岡山）

○ねん〳〵ねん〳〵ねんねの守は何處いた、山越して里へ行た、里の土産に何貰ろた、でん〳〵太鼓に笙の笛、簞笥に長持挾箱、それ程仕立てゝ遣つたのに、後に歸ろとおつしやるな。

○ねん〳〵ねんころやの兎は、批把の葉を喞へて、それで耳が長いぞ。

●兵庫節（同上）

○高いなア山かアら、谷底見れエば、ドッコイセ〳〵、瓜ヤ茄子の、ヨイヤイハ花盛り、ソリヤヨーイトコセ、ヨイトコセ、アリヤセ、コリアセ、ヤートセー。

●子買（同上）

○子買オ々々オ、子を取つて何にすりや、米の飯に魚副へて食はす、魚にや骨がある、拷つて食はす、拷りや汚い、洗ふて食はす、洗や水臭い醤油かけて食はす、

それもよかろ、どの子がよけりや。

●動物唄（同上）

○鴉々勘左衞門、髪イ結ふて何處へ往く。

○螢來い、螢來い、彼方の水は苦いぞ、此方の水は甘いぞ。

●蟲逐ひ（御野郡）

○おんねぼり、さんねぼり、あとささがいた。

●雜謡

○承知ないのに承知をさせて、入れて鳴かせる籠の鳥。

○譯の無いのに譯ある樣に、いふた譯なら出來た譯。

○お前親切私や金づくや、金が出來たらまたお來で。

備中國

●盆踊唄

○こなたおせどに、ひづるとたでと、なんのひづるめが、たで〳〵と。
○こちの旦那どのは傘育ち、世間ひろがり内しぼり。
○此方思へば照る日が曇る、冴えた月夜が闇となる。

●子守唄

○ねんねした子にや赤いべゝ七つ、起きて泣く子にや帶ひとつ。
○泣いて悔んで帶かふて貰ふて、質に置かれて流された。
○家のこの子が男の子なら、矢立腰にさいて掛とりに。

○あの子よい子ぢや牡丹餅娘、誰に似たやら子が出來た。
○あの子見やんせ私し見て笑ふ、笑ふ筈かやの阿呆ぢやもの。
○十九廿歳は名の立つ盛り、親も大目に見てお呉れ。
○今の若衆の有樣みやれ、錢が三文あればこそ。

●雜謠（玉島）

○うちの殿御は水島灘で、波に搖られて鯛を釣る。
○船頭可愛や穩戸が瀬戸で、一丈五尺の艪が撓る。

備後國

●戎（三原）

○ごーざつた〳〵、何に召してござつた、お船に召してござつた、積んだる寶は何アに〳〵、ふくれみのにかくれかさ、打出の小槌や、金糸の糸でナ、黄金の針でナ、お戒さんが鯛釣た、お目度うござんす。

●餅々（同上）

○もち〳〵〳〵もち、これのおごうさん（奥様）衣裳もち子もち、旦那さんは金もち私しは草履もちへイお目出とう。

●亥子祭（三原）

○いのこんこんや、いのこ餅搗きやらぬか、つきとうは有るが、ゑんざが叱る、ひかつたらまゝよ。

●盆踊唄（福山）

○踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損だよ。

○心短氣な男を持てば、胸に早鐘撞く如く。

○江戸へ〳〵と木草も靡く、江戸には花咲く實も生りて。

●花踊（沼隈郡）

○名所さま〳〵多けれど、凡て名所を尋ぬれば、清水寺こそ名所なれ〳〵。

○名所さま〳〵多けれど、山で名所を尋ぬれば、富士の山こそ名所なれ〳〵。

○名所さま〳〵多けれど、川で名所を尋ぬれば、立田川こそ名所なれ〳〵。

○茶園茶の木がなれば寢こそ、人の手をつめ茶をつめ〳〵。
○なほもしげれや此茶園、人かげの見えぬほど〳〵。
○茶摘む籠には茶はならぬ、なかに玉章ふみばかり〳〵。
○住吉の諸社のお前のそり橋は誰がかけへる中くりに〳〵。
○わが心かゞみに映つるものなればさぞや姿はみよからむ〳〵。
○わが戀は上田林に蔦かづら、上田林に夜をあかす〳〵。
○こなたのお背戸の泉水に、松千年はへて榮枝うてば、岸井の藤が舞さがる。
○こなたの御庭の梅の木へ、鷹がまゐりて巣をかける、巣かけ樣をながむれば、綾や錦や金襴緞子を組みまぜて、扨ても見事やヤレみごと。
○こなたの御背戸の雪竹に、白き雀が巣をかける、巣のかけやうを眺むれば、し

ろ金に金をくみまぜて、扨も見事やヤレみごと。
○櫻花咲ば一重に咲きもせず、人の心をつくす花。
○秋は菊夏は扇を身にそへて、忍びゆくみへ花の下へ。
○大和の國の内記どの、内記殿と云ふ人は、御前の御意がよいからに、備前と播磨と美作と三ケ國をとられたり。
○内記殿と云ふ人は、あまり有德に生れきて、錢をからげてふみはしに、太刀格子に云はれたり。
○内記殿と云ふ人は、日本一の伊達男、山寺兒に心を入れて、文玉章をかよはしやる〳〵。
○杵築太郎丈のおじやるそな、沖縄手に笛吹きやる〳〵。

○杵築太郎丈は拍子き〻で、足は太鼓、手ではつゞみ、口で青葉の笛吹きやる〳〵

○杵築太郎丈と寢てわかれるば、唯水が上のうき草よ〳〵。

○我を忍ばゝ御門の脇でお待あれ、もし露はれて人問はゞ、御門の御番と答へなれ〳〵。

○我を忍ばゝ茶園茶の木の其下で、もし露はれて人問はゞ、新茶を摘むと答へなれ〳〵。

○我を忍ばゝ曾根の小松の其下で、もし露はれて人問はば、松蟲とると答へなれ〳〵。

○音に聞えし丹波の椿、いざやもどりて花を詠めむ。

○音に聞えし芳野の櫻、いざやもどりて花を詠めむ。

○音に聞えし北野の梅は、いざやもどりて花を詠めむ。

○誰ぞや表に駒のりせる、おれが殿御の駒のりやる。

○誰ぞやお庭に鞠蹴やる、おれが殿御の鞠蹴りやる。

○誰ぞやく口に笛ふきやる、おれが殿御の笛吹きやる。

○誰ぞやお背戸に竹きりやる、おれが殿御の弓竹を。（其一句毎にヒムヨウと囃す、因て一名ヒムヨウ踊とも云へり）

●ハネ踊（沼隈郡）

○ヤーアアキラウ、あら目出たや地からも湧て空からも降る、地からも湧て空からも降らば、五穀も實る、五穀實りて豊の御代や、これも代ざかり、これの代ざかりに七くらたてゝ、貢納めてかしつけもする。

○目出度き御代のはじまりに、雨も程よく風とゝなふて、君の惠に蒼人草の、枝が榮えりや葉も茂る、サー〳〵ヨウレーヨウレーサムヨウレー。

●舟唄（御調郡澤田村）

○ヤアレ、鞆の港は源氏が源よ、上り下りが賴朝ぢアよ。

○ヤアレ、小歌島の鴉よ、錢の無いのに、かを〳〵とよ。

●三原の城

○見たか、見て來たか、三原の城は、地から、生へたか浮城か。

●一丁目先きの（三原）

○一丁目先の、二丁目の二丁目先の、三丁目の三丁目先の、四丁目の四丁目先のかい町に、かい町先に船山の、船山先の新倉の、新倉先の五番所の、五番娘は宜

い娘、一番さしなれ後生になる、一番、二番何のその、親の代から五番所じや。

●手毬唄（福山）

○向ひの船は誰が船ぢや〳〵、あれこそ備後の遊び船〳〵、遊ぶは矢張遊はいて〳〵、寶の橋から日が暮れて〳〵、西を向いても宿が無し〳〵、東を向いても宿が無し、殿さんがうやへ宿取ろか〳〵、殿さんがうやはきようといぞ〳〵、三八かうやへ宿とろか〳〵、三八かうやはきちやないぞ〳〵、向ふのをばさへ宿とつて〳〵、所は狹なし夜は長し〳〵、曉起きて戸外見たら〳〵、十七八の傾城が、〳〵金の木履を穿きつめて〳〵、金の漏斗を手に持つて〳〵、一ばい參ゐれじやうごにしよ、二杯まゐれじやうごにしよ、三杯目の肴には、赤瓜白瓜赤大根、赤いものは何々、二十紅の香箱々々、香箱揃へて中開けて見たら、赤い小袖が三つ

〜、白い小袖が三つ〜黄な小袖が三つ〜……。

●子守唄（三原）

○ねん〜ねんや、ねん〜子守は何所往た、あれは町へ茶買ひに、早く戻ると思つたら、雨が降つて滑つて、何所を通て戻らうか此所通て戻らうか、彼所を通つて戻らうか、ねん〜ねんね。

●いつち中の小法大師（御調郡）

○いつち中の小法大師が、いつちせいが低くいど……低くければ高かくなつて見せうわい、……頭の上に炙を立て、熱やかなしや金佛よ。

安藝國

●田草取唄

○咲いて萎れてまた咲く花は、優曇華の花木瓜の花。

○可愛らしさや螢の蟲は、忍ぶ暇に火をともす。

○私を冷罵す數の子男、何所の鰊が產んだやら。

○可嫌で幸ひ好かれて困る、外によいのがある私ぢや。

●麥打唄

○寒むや北風、冷たや暴風雨、私を思はドマジ（方言南風）が吹け。

○思ひ出しては泣く樣に御座る、泣いて明した夜が御座る。

○親のゆけん（意見なり）と茄子の花は、千に一つもあだがない。

●籾摺唄

○山が高うてあの家が見えぬ、あの家可愛や山惜くや。
○寺の門口蜂が巣をかけて、坊主出りや螫す戻りや螫す。
○猫が鼠捕りゃ鼬が笑ふ、鼬笑ふな我も取れ。

●盆踊唄

○みやと廣島に海が無かよかろ、いとし殿御を通はせはすまい、私がちよこ〳〵通ひましよ。
○渦がまひます廣島の沖に、渦ぢゃどいせん笑くぼでごいす、お前と私が中ぢやもの。

●船唄（竹原）

○安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七えびす。
○田舎なれども安藝さんは、沖のとなかに嚴島。
○船頭可愛や穩戸の瀬戸で、一丈五尺の櫓擢はる。
○鞆の向ふの仙酔島は、地からはへたか浮島が。

●手毬唄（廣島市）

○ばんばら〳〵やばんばら、屋敷のお姫樣お姫樣、金襴屏風を立て込んで〳〵、ほろ〳〵とお泣きやるが〳〵、何が不足でお泣きやるか〳〵、何も不足ぢやござらんが、私の弟の千松が〳〵、七ッ八ッから金掘りに〳〵、一年待てども狀がこん〳〵、二年待てども狀がこん、三年振りに狀が來て、狀の上書何んと讀まうか

千松戀ひしや金欲しや〳〵。

●同（竹原）

○私の姉さん椽から見れば、菊や牡丹の手鞠の花よ、上がりお滑りお下がり煙草此方の嫁女は何故髪結はぬ、腹が痛いかいとないか、食傷したか、腹も痛とないが食傷もせぬが、妾の腹には七月八月、若しも此子が男の子なら、上にのぼして社祢着せて、金の巾着小脇に下げて、宮の御前で百度を踏ましよ〳〵。

○阿萬來い來い、ういしろつましよ、汝が來たとて與る物無いが、筆や双紙や二重ものよ、まだも遣り度い長崎髪、入れて結はせて後から見れば、髷が三寸まきたてが二寸、あはせ五寸の投げ島田。

●雜謠

○可嫌ぢや阿母さん鐵道の人は、口先ばかりで實がない。

○時は世に連れ、世は時につれ、今の若い者は嗅を連れ。

○四十だ〳〵と今朝まで思ふた、三十九ぢやもの花ぢやもの。

○これのおせどのチラ〳〵雪に、誰が印たか下駄の跡。

○門で橘、格子の外で、内の様子をさ〳〵の花。

周防國

●雀踊（岩國）

○私や加古川本藏が娘、力彌樣とは二世の緣、モ一ッドマーヨーカーロー、力彌樣とは、二世の緣、アーリヤー、樣とは、力彌〳〵樣とは二世の緣。

○狹い心の柳の葉より、廣い芭蕉葉の氣を持ちやれ、モ一ッドマーヨーカーロー廣い芭蕉葉の氣を持ちやれ、アーリヤー、芭蕉葉の廣い、廣い芭蕉葉の氣を持ちやれ。

○神か佛か岩國樣は（岩國樣とは藩侯）扇子一ッで鎗のなか、モ一ッドマーアーヨーカーロー扇子一ッで鎗のなか、アーリヤー一つで扇子、扇子一つで鎗の中。

○たとへ山中三軒家でも、住ば都ぢやのうや殿御、モ一ッドマーアーヨーカーロー、住ば都ぢやのうや殿御、アーリヤー、都ぢや、住めば、住めば都ぢやのうや殿御。

○出羽ぢや庄内、越後ぢヤ新潟、こゝは會津の東山、モ一ッドーマーアーヨーカーロー、こゝは會津の東山、アーリヤー、會津の、こゝは會津の東山。

●臼挽唄

○今年や豐年どし穗に穗が咲いた、道の小草にや米が生る。

●田植唄

○雨が降つても燒く日が照るも、青田の中で、しよぼ〳〵と、してからくらす、百姓共、旦那だんさん苦を思やんせ。

●手鞠唄（山口）

○一二三四、四方の景色を、春と詠めてホーホケキョーと囀れば、明日は祇園よ二階上がれば囃しテンテン手鞠歌、手鞠仲好し四六六六、四七七七、四六八八、四六九十で一寸千突いた、一寸萬突いたよう千突いたよう萬突いた（此一章は京部の分を化傳せしものなり）

○船の船頭さんに晒の木綿を三反貰ふて、何に染よかと紺屋へ問へば、一にや澤潟、二にや杜若、三にや下り藤、四にや獅牡丹、五ついやまの千本櫻、六つ紫色よふ染めて、七つ南天、八ッ山吹、九つ小梅のちらしを付けて、十で殿樣の氣に入るやうに。

○蓮華女郎々々々々、蓮華の花は何して泣く、親が無いか子が無いか、親もある。

が子も在るが、たつた一人の娘の兒、酒手に取られて、今日七日、七日の仕揚げを仕樣と思ふて、姉さん方へ帷子一枚借りに行たら、有るもの無いチウてお貸しやらぬ、ヤーレ腹立つ小腹立つ、夫れ程腹が立つならば、いんで裏の木小屋へ機立てゝ、今日も一反織下し、明日も一反織下し、織つて下して、東の紺屋へ遣つたらば、藍が出ぬチウて受取らぬ、西の紺屋へ遣つたらば、亭主が留主チウて受取らぬ、殿樣紺屋へ遣りたらば、藍が出たチウて受取つた、紋もちらしも、よく出來たよく出來た。

○向ひの米屋のお夏さん、嫁に貰ふが來やらぬか、はいはい行きましよう參じましよ、明日は早朝から早く起きて、隅から隅まで掃き出して、障子の小影で髪結ふて、背戸の小溝で手々洗ふて、内へはいつてテンテン手拭で手々拭いて、チヤ

ン〳〵茶釜で茶々湧かし、祖父さん祖母さん起きさんせ、何にも茶口は無けれど牡丹餅黄粉で茶々召れ、茶々召れ。

○此家の背戸のチシヤの木に、雀が三羽止まつて、前の雀も物知らず、跡の雀も物識らず、イツチ中の小雀が、物をチャン〳〵能く知つて、シロ三枚ゴロ三枚、合して六枚敷詰めて、結構な嫁女を呼んで來て、金襦緞子を縫はすれば、何が悲しうて泣かしやんす、私の弟が千松で、七つ八つから金山へ、金が無いやら死んだやら、一年待つても狀が來ぬ、二年待つても狀が來ぬ。

○木戸を通るはお醫者じやないか、醫者はお醫者じやが藥箱持たぬ、藥入るなら袂に御座る、藥一服煎じて呑んだら、腹に居る兒がどんどと下る、若しも其兒が女の兒なら、苞へ包んで沖の川へどんぶりしよ、若しも其兒が男の兒なら、京へ上

ぼして手習さして、金の硯箱蒔繪の筆で、水は近江の落し水、落し水。

○一つ人々禮儀が大事、二つ深いは親子の道理、三つ皆さん辛抱が大事、四つ世の中開けて繁昌、五つ何日でも養生が大事、六つ村里次第に繁昌、七つ何より家作が道理八つ山には草木が繁昌、九つ子供衆に學校が大切、十で豐年五穀が繁昌さてさてお目出度や。

○國の守りの武士は、忠なる心をふり起し、八島の海の底迄も、高きてがらを耀かし、國の備への勇士は、勇しきわざ習ひ得て、ゑむこうわざ打なみて、高き勳を讀みたてよ、高き勳を讀み立てよ。

○向を通るは生徒じやないか、六つの年から學校通ひ、砂を燒く夏雪降る冬も、雨の降る日も風吹く日にも、ついぞ一日遲參もせずに、精を出したる利發の娘、

何日の試驗も皆よく出來て、今は生徒の第一番よ、夫れと云ふのも常平生から、人の云ふ事よく聞き分けて、寢ても起きても我儘云はず、父と母との敎へを守り外の敎師の諭しを受けて、習ひ覺えし修身行儀、親の名も出る世間でほめる、ほんの孝行娘ぞよ、あやかるなあやかるな。

○確かに〳〵受取りました、これまた大切なお手毬樣よ、蜜柑くゝして括してあげて、四十島田の小糸を締めて、締めたもッとへいろはと書いて、いろは戻りのはの字と書いた、今日今晩誰から誰さんへお渡し申す。

●子守唄（山口）

○ねんねこよーねんねこよ、ねんねの守りは何處行つた、山を越えて里へ行つた里の土產に何貰ふた、でんでん太鼓の笙の笛。

○ねんねこよーねんねこよ、寢たら山の雉子の子、起きたらごんごにかーぶらしよ。

ごんごにかぶらしよは恐いものに食はすの意。

○ねんねこよーねんねこよ、寢たらおかゝへつれていの、起きたらごんさにかぶらしよ。

連れていのは連れて歸る事。

○ねんねこよーねんねこよ、ねんねこさんねこ酒屋の兒、酒屋が嫌なら嫁入さしよ、嫁入が嫌なら釜崩し。

釜崩しは嫁がず後家の事なり。

○ねんねこ猫の口口へ蟹が這ひ込んだ、痛けりや痒けりや退けてやろ、えゝやつ

やつと退けたらまた這ひ込んだ。

○お守が父さん何所へ往た、長野長崎金掘に、金掘らずに後方見れば、後方はや時雨の雨が降る。

●遊戯唄

○鼠ねずみ、ようかゞめ、後から猫が尾いて往く、そら〳〵〳〵、早う往かう、そら來い早う此の内へ。

○厠々〳〵、臭い臭い、味噌屋味噌屋、味噌なら買はう、どの子が可いか、一番端の小坊主、何を食して養ふか、鯛の酢に蒲鉾、それなら嫌々、……それならやろ〳〵。

●月を見て　（山口）

○あとさん何ぼ十三九つ、そりやまだ若いよ、若い年しや道理、紅粉かねつけてお寺へ參て、お寺の門で團子一つ拾ふた、そりや誰に抱かしよ、おまんに抱かしよ、おまんの部屋は金の屏風にきりこの枕、跡は緞子どんすよ。

●同　（吉敷郡）

○お月様〳〵、申し〳〵、猫と鼠が一升樽下げて、富士のお山を今越えた。

●山の燒けるを見て　（山口）

○山を燒くのは誰か、大市の長さ、出て見りやほやけ。

文市は町名なり。

●夕方鴉歸るを見て　（同上）

鴉々跡の鴉さきいね、我の家は皆燒ける、早よいんで水掛けよ、手桶が無けねば

買ふてやろ、柄杓が無ければ買ふてやる。

さきいれは先へ歸れの事。

●雁など群り翔るを見て（同上）

○鶴雁竿になつて通れよ。

長門國

●祝唄

○扇の要に池掘て、池の汀に田を植ゑて、一もつ刈りては二千石、二もつ刈りては四千石、三もつと刈りては程知れず、山にたとへば富士の山、酒につくりし泉酒、この酒頂戴ずる人は、御壽命も長かれ、コリヤ福もあれションガエ。

●大唄

○此盆に花が咲く、おゝかちの花が七重咲く、さり上げ、さり取りさるは八重も咲く、伊勢で芋くてかぶ〳〵と飲まばや、お泊りなれば此宿に、今もや床にも圓札を積み揃へた、どうでこの家は仕合はよかろ、イヨハヲカオイ。

●餅搗（下關市）

○祝ひ目出度の若松さまはよ、枝が榮へりや葉も繁茂るよ、ハラヨイヨイ。
○これのお家はもとから繁昌よ、今は若世で尙ほ繁昌よ、ハラヨイヨイ。
○お前百まで私しや九十九迄よ、共に白髮の生へる迄よ、ハラヨイヨイ。
○鬼が餅搗さや烟魔がちぎるよ、地藏菩薩は採み食やるよ、ハラヨイヨイ。
○沖の鷗に潮時問へばよ、私しや立つ鳥、浪に問へよ、ハラヨイヨイ。
○唄へ〳〵と責め掛けられてよ、うたがお俊で傳兵衞さんよ、ハラヨイヨイ。
○この兒よい兒ぢや牡丹餅顏でよ、黃粉付けたら尙ほよかろよ、ハラヨイヨイ。
○目出度〳〵の若松樣はよ、末は鶴龜五葉の松よ、ハラヨイヨイ。

○これの座敷は目出度い座敷よ、茗荷よろこべ蕗繁昌よ、ハラヨイヨイ。
○これが此家の仕舞の臼ぢやよ、臼にや暇やる私は立つよ、ハラヨイヨイ。

●算盤持ちやれ（安武郡）

○算盤持ちやれ、知らいで米屋が出來よかと、ヨ、、四六二十四は、ヤレ二斗ヤア四升、二斗ヤア四升エソコソコ。

●手鞠唄

○伊佐の油屋は大金持で、庭にや麥臼、座敷にや茶臼、奥にや三味線二階にや鼓御座れ友達お伊勢に參る、お伊勢御門のくゞり戸の下で、七つ小女郎が八ッ子をまうけて、產むに產まれぬおろすにやおりぬ、あれに通るはお醫者ぢやないか、醫者ぢやあつても藥箱持たぬ、これに一服持ても居るが、是を煎じて飲まして見

やれ、腹に居る子がどんどゝ下る、下る其子が娘の子なら、すぼに包んで三所締て、前の小川にやれつき流せ、そらつき流せ、もしも其子が息子の子なら、洗て育てゝ社祢着せて、京に上せて手習させる、金の硯箱蒔繪の筆に、水はお山の落し水、すつとんとんよとうふくとろゝ、みよふくみつゝ、さいだの坂から日が暮れて、笹の葉の落がすたばたあへた。

●同（下之闕）

○アレ〳〵見やれアレ見やれ、アレに見ゆるは八百屋店、八百屋店なら小間物屋芋大根胡蘿牛蒡酢酒ヱ南瓜生薑賣れる、夫れに娘が居るさうな、色白お白の美い女房、目細鼻高櫻色、銀の簪品好くて、お七にさゝせて容姿を見よ、吉三が惚れるは無理もない、吉三が手習する時に、離れ座敷の奥の間で一段上れば惚れと

なく、二段上れば惚れとなく、三段四段と上り詰め、上り詰めたる物案じ、死んだら佛になりさうな、トコトン。

○向ふ山寺、鉦や太鼓の音がする、ヤーレ聞きたや參りたや、姉嬢の帷子貸しやらんか、姉嬢の帷子血が附いて、血でもないこそ紅でこそ、紅は何處紅中津紅、中津紅なら尚好からう。

●子守唄（同上）

○寢たらお母さんに連れて歸のう、起きたら幽靈に嚙らせる。

●天氣天象の唄（下之闕）

○山ン坊〳〵、風一杯だして呉れ、餘ッた風は皆戻す。

○雪は殿樣、霰は女郎衆、霙は槍持ち。

○日が照ッて雨が降る、狐の嫁入り。

○月兎さん何んぼ、十三九ッ、夫れやまだ若いよ、若い事は道理、道理の道で、子を一人拾ふて、夫れや誰に抱かせやう、おまんに抱かせやう、おまんの部屋は金の屏風に切子の枕、キイ〳〵と鳴いた。

●動物唄（同上）

○あとの烏や先になれ。

○烏〳〵紺烏、お前の内は皆燒ける、早く歸んで水掛け。

南海道

紀伊國

●紀州言葉（和歌山）

○紀州言葉のお出でよし、來よし寄りよし上りよし、蒲團敷きよし、煙草喫みよし。

●節分（同上）

○ヤーレ芽でたやな、めでたいとで拂ふなら、當家のお裏の金藏に、白い鼠が三つ走る、小判啣へて走るなり……（中略）……これもお家の御吉兆、もしも惡魔が

來るなら、この厄拂ひが引つ捉らへ、西の海へサラリ〳〵。

●麥搗唄（和歌山）

○五月ッさ、來たらこそ、お前どわしと、向ひ合して麥を搗く。

○終へた〳〵よ、此麥終へた、糠は神樂に舞ひ上る、コラマカサノウ。

●馬方唄

○馬の鈴鳴りや馬士衆と思ふてよ、三度出て見たよ、えゝ路次へ。

●盆踊唄（和歌山近在）

○圓くなれ〳〵、まん圓くなれ、十五夜お月さん程まん圓くなれ。

●同（東牟婁郡）

○揃うた〳〵よ踊り子は揃うた、東窓から西窓へ。

●同（橋本邊）

○やつちよんまかぜひ、なあこりや踊れ、しなよく踊れ、信濃善光寺、なあこりや踊れ、踊り好。

●同（有田郡）

○一夜こけてこい ツリヤ 菜種の中へエなたらねをらぬよにスリヤこけエてこい、サアヘエ

チヨコスリヤヨーヨサリヤ、スイタリサ。
イタリシヨウジヤナイカ、シヨンガベト

●和歌の名所

○和歌の名所のあらましは權現玉津島、芦邊、三ッ橋、不老橋、鹽濱片男波、微かに見ゆるは物殿布引紀三井寺。

●婚禮唄（和歌山）

○お前百歳まで私しや九十九歳まで、共に白髪の生へるまで。

●月の唄（同上）

○お月様幾つ、十三一つ、そりやまだ若い、若船へ乗つて、唐まで渡れ。

●遊戯唄（同上）

○ちきちつきん、とらやのや、なじよは、なじよそうぢやげな、つゞでんぢの、すつちやかちやすか、どん〳〵、屋根行きや轉げる、天井行きやまくれる、はつぢよはちがはま、はつちよ砂原、砂地にしよんべん、なつは下駄穿いて、ぽつくり〳〵。

○やらすや百足、頭は茶臼、尾はひこ〳〵よ。

○ずゐ〳〵車の博多獨樂、このちよへ合せて合すかぽん。

●手鞠唄（日高部）

○此所から鐘卷へ十八町、六十二段の階を、登り詰めたら仁王さん、左に唐銅手水鉢、右に三階塔の堂、裏へ廻れば一寸八分の觀音さん、牡丹櫻に八重櫻、釣鐘、おろして身を隠くす、安珍清姫蛇に化けて、七卷半卷き一まはり。

○籔の中のくつ〳〵は、父御放れて奉公する、奉公するや町どこや町、大阪新町酒屋町、酒屋の女房はよい女房、朝もとうから起き習ろて、二階へ上がつて窓開けて、窓の明りで髪結ふて、炬燵へもたれて晝寢する、晝寢のお夢がいふことにや、此所のちしや畑へ雀が三びき飛んで來て、此所の隠居はよい隠居、疊三枚ぞ三枚、合して三枚一とまはり。

●子守唄（和歌山）

○ねんね根來のお城の數でよ、とりよりこいよの鳩が鳴くよ。
○紀州紀の川荒川粉川、おまん裏むは竹の皮よ。
○泣いてお呉れな殿御の留守によ、鶏啼きさへ氣にかゝるわよ。

●羽子突唄

○一とめ、二ためめ、宮越し嫁子、五つ家の、むさし、七家の藥師、九つか十よ。

●雜謠

○これさ娘さん、私ちのひふこと聽かないか、實眞劍に事汲み分けて、鼻に持たないとてほをるものか、ウンとさへ返事するや家の鼻放り出せ、阿爺が煙たけりや別に世帶持たないか、ハッ〳〵。
○上る夜舟は三十石、赤川森口定の宮、申し川ざらひが三文で、曳いて上るは平

方の倉はんか〳〵と起せは、お客が寢惚て、ハッ〳〵、餡餅羊羹ひもじるどうぢやい。

淡路國

●盆踊唄（岩屋）

○ばち〳〵さんかと思ふた、こがの口ほどあ、あいて居る。
○つぶりよとやきよと、我町大事の町つぶ、つぶそまい。
○明石とのさん大き事願た、岩屋が瀬戸へはア、橋かきよと。
○娘子そろたア、うちでだんごうしイしてきたか。

阿波國

●方言唄（徳島）

○うら（我）が國、ぎよう（仰山）に咲いたる梅の花を、やれ（ハテ）けうとは（甚しく）ゑずな（嫌ふべき）山風。

●盆唄

○あたけ戀しくさまつた山がよひ、つたのたていしほしつまに。
○鳥もぼつ〳〵夜もほの〳〵と、鐘も鳴ります寺々に。
○雨が降ろとて沖から曇る、娘さろとて婿が來ぬ。

●手毬唄（徳島市）

○向ひの御山に火が見える、星か螢かお提灯か、お提灯點して來て見れば、それはお山のお祭りぢや〳〵、太鼓持ちやどん、駕籠かきやよい、按摩とりやびい。

●げんばら蟲（同上）

○げんばら蟲〳〵屁はぶう〳〵と、櫨木で味噌摺つてはいつて來い。

讃岐國

●水踊唄

○さかひの町は、廣い樣で狹まい、雨さへ降れば、簑よ笠よ、ヒア雨が降らうとまゝいのう、しつぽと濡れて、水か〳〵、さあ此方御座れ〳〵。

○池田の町は、廣い樣で狹い、雨さへ降れば、簑よ笠よ、ヒヤ雨が降らうとまゝいのう、しつぽと濡れて、水か〳〵、さあ此方御座れ〳〵。

○八坂の町は、廣い樣で狹まい、雨さへ降れば、簑よ笠よ、ヒヤ雨が降らうとまゝいのう、しつぽと濡れて、水か〳〵、さあ此方御座れ〳〵。

●四國

○四國箱の岬の汐の早さに、沖漕ぐ舟は、にほひやアやつすインヤにほひやアつす。

○四國阿波の鳴門の、汐の早さに、沖漕ぐ舟は、にほひやアつすインヤにほひやアつす。

○四國土佐の岬の汐の早さに、沖漕ぐ舟は、にほひやヤつすインヤにほひやアつす。

●臼挽唄（那珂郡）

○家の姉さん粉を挽きや眠むるよ、團子食ふ時や目が光るよ。

●盆踊唄

○志渡はよい町、西北をうけ、八島嵐はそよ〜〜と。

○八島山には大谷小谷、なぜに此方に子が無いぞ。

○みすじふろが谷朝寒む御座る、炬燵やりなしよ炭添へて。

○丸くなれ〜〜チョイと丸くなれ、十五夜お月ほどチョイと丸くなれ。

○角に〜〜チョイと角になれ、米屋の升程チョイと角になれ。

●手鞠唄（琴平）

○正月とせ、障子あけたら萬歳が、鼓を打つやら謡ふ聲〜〜。

○二月とせ、二日三日は寺詣、翌日は彼岸のお時正〜〜。

○三月とせ、櫻花よりお雛様、飾つて美事な内裡様〜〜。

○四月とせ、死んで又來るお釋迦様、筍柄杓で、造り花〜〜。

○五月とせ、ごん〜〜櫻の前垂を、正月締めよと、たて買た〜〜。

○六月とせ、ろくに烟草も、吸はないで、兄様に吸はれて、腹が立つ〳〵。
○七月とせ、質屋の庫は混雑で、出したり入れたり流したり〳〵。
○八月とせ、蜂にさゝれて、泣くよりも、何か薬はあるまいか〳〵。
○九月とせ、草の中の墓、姉様一匹頂戴な〳〵。
○十月とや、重箱抱えて何處へ行くの、翌日は夷講のおよばれに〳〵。

●子守唄（同上）

○うちのねんねは、りこもんぢや、ねんねのお守は何處いた、お山を越えて里へいた、お里の土産に何もろた、カン〳〵太鼓に笙の笛、それを貰ふて何にする、吹たり、たゝいたりして遊ぶ、ネーヘン〳〵、ネーヘンヨ。
○ねんころやしまのお兎は、なぜにお耳が長ござる、小さい時に阿母さんが、お

耳をくわいて引張つた、それでお耳がなご御座る、ネーヘン〳〵ネーヘンヨ。
○この兒寢かして布團を着せて、ぐるりたゝいて針仕事〳〵よー、ネーヘン〳〵ネーヘンヨ。

●

一偏に大事は後生なり、常々念佛わするなよ。
二ふたゝびわはれぬ今日の日を、空しく暮らすは愚なり。
三みだい大事と思ふなら、守にあはれをかけさんせ。
四善きも惡きも打捨てゝ、佛のお慈悲に取り縋かれ。
五いつまで此世に居るものぞ、命は幻し花の露。
六無限地獄へ墜る身を、其まゝすくふは彌陀如來。

七奈落へ沈むに邪で、もらせたまはぬ御誓願。
八山程金銀ある人も、死出の旅路は唯獨り。
九心素直に本願を、賴めば其まゝ佛なり。
十尊とき敎の念佛は、つとめよ唱へよ信ずべし。

右何れも一節終る毎にネーヘンノ〳〵ネーヘンヨと唄ふなり。

●同（高松）

○ねん〳〵よ、寢んねーた子に羽子板と羽根と、寢んねせん子に羽根ばかり

●高い山から（美濃郡甲田村字佐古邊）

○高い山から谷底見れば、瓜が三味ひく西瓜が語る、ひやけ茄子が舞をまう。
○高い山から金山寺を見れば、やせた娼妓がしらめとる。

○高い山から谷底見れば、見れば見る程齒に藥、藥峠の權現樣、樣と佐渡笠横ち
よにかぶり、かぶり振る〳〵子が出來た、出來町通れば二階から招く、姉が二十
一妹が二十、はだしで道中がなる者か、なつてもならねでもして來たが。

●金毘羅さやばし（同上）

○金毘羅さやばし內ゑち兩側、留女、虎屋に櫻や丸龜屋、大阪のりこしていくと
はや、大つけな仁右衞門たつて居る茶屋に萬どは石の獅子々々。

●往こか丸龜（同上）

○往か丸龜歸へろか多度津、こゝが思案の中津橋。

●多度津よい所（同上）

○多度津よい所ヂヤ桃山ふもと、げうぢヤないか蒸氣船の煙を寢ちよつて見とつ

たつきました。

●向にちよろ〜〜（同上）

○向にちよろ〜〜火が見えをする、あれは大阪安堂寺町のお安々々山越えて京へ上て男に惚れて、惚れた男に何買ふて貰た、櫛や笄紅白粉、買ふてもろた、買ふてもろた。

●一おいて廻れ（琴平）

一おいて廻れ、私しや市ヤたてむ、市場ならこそ市ヤたてをする。
二おいて廻れ、私しャ庭はかぬ、丁稚ならこそ庭はきをする。
三おいて廻れ、私しや三味ひかぬ、藝妓ならこそ三味ひきをする。
四おいて廻れ、私しや皺よらぬ、年寄ならこそ皺よりをする。

五おいて廻れ、私しや碁はうたぬ、ゑいしゆならこそ碁はうちをする。
六おいて廻れ、私しや艪は押さぬ、舟子ならこそ艪はおしをする。
七おいて廻れ、私しや質ヤ置かぬ、貧乏ならこそ質ヤ置きをする。
八おいて廻れ、私しや鉢わらぬ、あはてものならこそ鉢わりをする。
九おいて廻れ、私しや鍬もたぬ、百姓ならこそ鍬もちをする。
十おいて廻れ、私しや地は持たぬ、鼠ならこそ地はもちをする。

●螢狩（同上）

○螢こーちこち、行燈のお影で飛んで來い、あつちの水はからいぞ、こつちの水は甘いぞ。

伊豫國

●臼搗唄

○おんじ黒川に伯母さん御座るよ、伯母は邪見で茶も汲まん。
○おんじだばへさや、種蒔きや生へるよ、なぜにお前にや子がないぞ。

●臼挽唄

○臼を挽く時や、眠むり目で挽くが、團子食ふ時や猿眼。
○結ふてやんないわたしの髪とよ、癖も直らいすぢもたつ。
○梳いて結ふてもお主の髪はよ、中のもつれは直りやせん。

●船唄

○エ、見る間に遊ぶつれ魚の、エイ、ちよにや〳〵ちもりの、エイ、わかなたかき大しるし、山に遠道の人々は、おきてついたい殿様船よさ。
いはひ目出度の若松様よ、」
おきてついたい殿様船よ、」
つくところへしみはまの鯨、」
竹になりたやお山の竹に、」
まへな轤轆に綱くりかけて、」
天がした〳〵まづ見てかしと、」

●伊豫節

○阿波の徳島十郎兵衛娘、年は九つ名はお鶴、手には杓持ち順禮に、報謝という

て巡る、巡るお方を、お弓一寸目にあり、扨もーをーし順禮衆、定めし連れ衆は親子達、いえ獨旅。

●盆踊唄（今治）

○木山六之丞はナゼに色が黑いぞ笠が小まうて横日がさすぞよ。

こは慶長七年の頃藤堂高虎が宮所に築城の際、普請奉行木山六之丞といふ人極めて色のくろかりければかくは唄ひはやしたり、これを木山音頭といひて上流の人の盆をどりの唄なり、これには藩士も立交りて踊りしとぞ、因にいふ木山氏は藤堂氏が伊賀へ移りしも同家へ仕へられしよしなり。

○盆ぢやぼんぢやーとたのしむけれどエイソレ、盆もはやすむ夜も明るヤアレおかしかエ。

こは稍下等社會の唄にて、藩士などは此群にいらぬ事なりしとぞ、兩樣ともに維新前までは唄ひたりしが

近頃は公より嚴禁して盆踊りは廢止となりしといへり。

●手鞠唄（宇和島）

○げゞばな〜、何爲泣きやる、親が無いか子が無いか、親も御座る子も御座るお可愛し殿御や鷹匠町、鷹に取られて今日七日、七日思へば十五日、細道でゝ聽けば、鼓や太鼓でお囃しやる、餘り聞き度さ逢ひたさに、おはじよの所へ寄てから、綿帽子貸しやれといふたれば、有るもの無いとてお貸しやらん、あッ腹立や腹立ちや、それ程お腹が立つならば、彼方のこう屋へ宿取ろか、此方のこう屋へ宿取ろか、莚はせゝかし夜は長し、一とまへをる間に日が暮れて、二まへをるまに夜が明けて、朝とき起きて空見れば、十七八の傾城が、紫盃手に据ゑて、一杯あがれや丹波樣、二杯召がれやおしやくとり、肴が無いとて召らぬか、私等

の國の肴には、白瓜赤瓜眞桑瓜、まだもあるのは鮎の鮨、一イ二ウ三イ四オ五ツ六ウ七八ア九十ヲ。

○千松こい〳〵上らんか、上る支度はしてあるが、餘り此の子がせはしうて、泣く涙を舟に積み、船は何處船、大阪船、大阪土產に、何貰らた、一に香箱二に鏡三に薩摩のいた買うて、いたやもんたや門立て、門の周圍へ鷹据ゑて、鷹の尾ばちへ香を持て、香の煙は西東、雁か白鳥か鵜の鳥か、ねゝさ寄つて見たら白鷺よ、一イ二ウ三イ四オ……。

土佐國

●方言唄（高知市）

○けゑ〳〵とちふは（是々云ふ）、吾子等か（ワコ）、ゑずらしや（嫌ふべき）、ぜじやう（一體）、しようちや（精進）、よんべ（昨夜）來たちゝ（と云ふ）

●土佐の訛

○土佐の訛は彼者に此者、おんしや（汝）どうすりやおら歸ぬる、一件の事はどうならや、居るかや寢るかや止めるかや、そない（其樣）に云ふなよ默つちよれ、默つて居れるか、おいとほせ、實に滅相くだらん（不都合）よ、歸んだら、おなん（母親）にいうちやるぞたかでたまるかやちがない、ヤア〳〵。

●天氣天象の唄

○雪やこんこ、霰やこんこ、お寺の柿の木、降りやとまれ〜〜や。（高知市）

○雨ぶんぶ降るなよ、蝦蟇に艾すゑるぞ。（上同）

○雨々降り歇め、お寺の前の、柿の木の下で、雉子の子が鳴くぞ。（幡多郡）

○お月様桃色、誰がいふた、海女がいふた、海女の口よひき裂け。（高知市）

○お月さん鏡買うておせんか、そんな事誰が事うた、あまがいふた、あまが口つんぢやれ、つんだら痛い、痛けりや鼬の糞をつき、鼬の糞つけたら汚ない、汚けりや洗へ、洗や冷い、冷けりや暖れ、暖りや熱い、熱けりけ退され、退さりや蜂が螫す、そんならどうでもかうでも勝手にしよ。（幡多郡）

○向ふ山でチラと明かるは、月か星か螢か、お月さんなら拜みませうが、螢さん

なら手に取る〜〜。（上同）

○大寒小寒、甲浦へ飛でいた、甲浦の子供は賤しい子供、父の錢よ盜んで、母に鯛を買して、鯛の骨よたてゝ、拔いて呉えきいやこ、さいて呉えきいやこ（高知市）

●田植唄

○坊さんよ〜〜、木履を買ふてたもれよ、一夜も寢もせで、はや木履を〜〜と。

●木挽唄

○木挽するよりや偏路がよしぢや、麥の粉を喰ふてお茶呑むヤアレ。

●木伐唄

○山のものぢやとアーべて呉れな、山ぢや木もある氣も晴れる。

○韮蔓橋、正月二月三月五月、田の中の蹈蛛のその如く、風に吹かれてゆら〜〜

と、モウトクナンショ、エ、エ、エイヨナノ、ハリヤリヤノエイ、ハリヤヨヤサ
ア〜〜〜ノサ。

●蟲送り唄

○齋藤別當サンネモリ、稻の蟲は、ひしげた。

●コスコス神事（森山）

○ちよまでや、わかんや、はふりまつる、ちりへッぱう、はじまりて、さゝらえをとこ、いかはりしんでん。

●町づくし（高知市）

○高知の松がはな番所を西へ行く農人町、西園場、新堀、魚の棚、紺屋町、稗崎町、打越して京町、行くとはや會所が立つて居る、程なくしさやを打起して堺町

本町八町通します、そこらで枡形本町つきぬけ觀音堂。

●祝唄

○五葉は目出度の若松樣よ、ヨイコハヤレ、枝も榮える葉も茂るヨイヤナア。
○枝も榮えりや鬼葉も繁る、ヨイ下ろせ小松の一の枝、ヨイヤナア。
○下ろし詰めたら休ましよといふた、ヨイ、何で休ましよに又山迄も、ヨイヤナア。

●手鞠唄（高知附近）

○今日は日が好うて船乘り出してよ、京へ行こうかよ大阪へ行かうかよ、大阪川口の絲屋の娘は、姉は物書き妹は手きゝよ、手きゝお師匠樣にお願ひこめてよ、伊勢へ七度、熊野へ三度よ、愛宕樣へまで月參りよ〜〜、月の戻りに扇箱拾ふて

よ、足で蹴上げて手に取り見ればよ、裏にや白むく中には黄むくよ、上に紋茶の繻子の帶よ〳〵、船は出て行く帆掛けて走るよ、茶屋の娘は出て招くよ、〳〵、何んぼ招いても嵐が強いよ、今度小嵐に又招くよ〳〵、此處は御家は芽出度いお家よ、鶴と龜とが舞ひ遊ぶよ〳〵。

○蜜柑々々〳〵、崩して置いて、四十四貫のお紙に包んで、紙撚で締めて、締めた印を柳と書いて、柳の下へ、石菖を植ゑて、石菖に實が生りや何年通る、三年通る三年土産に何買て貰ろた、硯煙草に帶貰ろた、紬けて結んで遙々、春の御門を明けて見たら、彼樣坊主に此樣坊主が、はら〳〵行くとて、鰯三尾買うて來て、燒いて焦して棚へ上げたら、猫が打ち食うて、猫を追ふとて、椽の柱で頭ごつくらした、おゝのいたやのお萬が部屋で。今朝こそ見たれ、昨日こそ見たれ、三尺煙

管へ煙草をついで、是なと參れ、彼なと參れ、私は眞實煙草は嫌ひ、殿の御意なら一服、喫もぞ、二服は嫌ぞ、ちよいと三服のうんだ。

○太夫さん〳〵、桃色に花色が、梔染めて、まだ色づかん、ひとのふたの、せゑのよの、九つまかせがいつくが、めしふくトふくとろゝ、おちよおまりごんせ、わしがとなりの、しろかの盡しの、かうしさし盡しの、今日今晩、大事のお姫を阿千代に取られて、硯も要らん、紙も要らん、是から阿千代さんの、御手のお下へ、しん〳〵しつかと、慥にたまかに、お渡し申した。

●子守唄（高知市）

○ねんねご、ぼろりて、とこさんせ、ねんねの守は何處へ往た、山を越えて里へ往た、里の土産に何貰ろた、でん〳〵太鼓に笙の笛、出端の乳へ砂糖をつけて、

坊が起きたら飲みますぞよ。

○朝はとうからおひるなれ、お乳の出端を進げましよぞ、お乳の出端がお嫌ならば鯛の濱燒雁の汁、ねん〳〵〳〵や。

○旦那さんがよに、上さんよけりや、すまい、仕事も、しようものを、糸さん可愛ぢやなけれども、お飯の種ぢやと思やこそ。

○ねんね〳〵と云ふて寢る子は可愛、起てなく子はつら憎い。

○起て泣く子を俎に乘せて漬物きざむよにきざみたい。

○旦那大黒、上さんゑべす、ござるお客は福の神。

●遊戯唄（同上）

○中の〳〵小僧は、何爲身丈が低いぞ、阿彌陀の光りでまつこう低いぞ。

○鍛冶屋の繼子、藁一把持て來い、尻よ眞赤に燒ちやるぞ。

○昨夜できた龜の子、まだ目が明かん。

○ねぜろこぜろ、帶屋の裙まで、ねぜろこぜろ、帶屋町の裾まで、ねぜろこぜろ

○子賣ろ〳〵、戻りによろ、どの子が可愛、此の子が可愛、花は何花、牡丹芍藥百合罌粟の花、もうまきやないか、天に一ばい地に一ばい、行き候戻り候、お山伏多くの子供を引き連れて。

○たゝき山も候、ひゞき山も候、ひゞき山の中に、とふが一軒たつちまつて、其とふの中に、黑い蟲が一つ、黃な蟲が一つ、青い蟲が一つ、黑い蟲の云ふ事にや其處通る女郎衆は尻切金剛のおんまらしよう、殿が乘てなぶるか、殿は京へお上り、上りの併が、卅三枚足いで、倉賣ろ馬賣ろ、馬も倉も賣るまい、其馬へ飛び

乗つて、あはいやびんび、讃岐のいちご、まだ年や若い。

○友達々々何處往て、上の山へ花折りに、花は何花躑躅花、一枝折つては御手に持ち、二枝折つては腰に差し、三枝折る間に日が暮れて、先へ往こも怖ろしや、後へ戻るも怖ろしや、中のてんやで宿借て、莚は短し夜は長し、朝とく起きて空見れば、十七八の娘さんが、かみさかづきを戴いて、下盃をお手に持ち、ま一つ参れのしようごさん。

●動物の唄

○鴉鴉、何處へいく、大津の湯に行く、何々持つて行く、大鯛小鯛、鮑やびんび（高知市）

○鴉鴉、鐵漿つけて何所へ行きや、神社へ詣り、神社の前の、鳥居の下で、いつ

ちいとい〳〵が、油鮨喞へて、此方へひよろり、彼方へひよろり、藪の中へごそ〳〵。（幡多郡）

○狸さん〳〵、火を一つ貸さんせ、此の山越えて、彼の山越えて、火は此所にこち〳〵。（高知市）

○螢來い、水飲ましよ、彼地の水苦いぞ、こちの水、甘いぞ〳〵。（上同）

○蜻蛉々々、おとまり、明日の市に、鹽辛買ふて舐らしよ。（上同）

○ぼうしぼうかアやれぼうあふらめんにきめんに怖ぢて逃げるか。（上同）

○蝦蟆さん〳〵、出てごんせ、出にや変するぞ。（上同）

○蝸牛々々角出せ、河原の婆が豆を炒つて食はす。（幡多郡）

●雑謡

○會津殿さんに遣りたいものは、豆腐袋に碗一つ。
○會津殿さん俎に載せて、青葉刻ざむ樣にきぞうぢやれ。
○はやく會津から飛脚を立てる、錆た刀を研いちよけ。
○會津攻めよか仙臺討たうか、今朝の出がけに二本松。

これは土佐に限らず官軍方の各藩に謠はれしなり。

○薩州西郷さんに遣りたい物は、金の生る木に彈藥。
○薩州西郷さん鰯か雜魚か、たひに逐はれて逃げて行く。
○成咸の清國兵士は何故弱い、日本兵士を見て逃げた。

西海道

筑前國

●松囃子（福岡市）

●兒謠　唐衣すそのが原の姫小松（返し）ひけば千年も我袖に籠る春ぞめでたき、
此御代の春ぞ目出度、梅が枝も〳〵花咲きてこそ匂ひけれ、思へば春ぞたぐひな
き梅をいざやかざゝん此花をかざせ人々　あげ羽君が代にかげを併べて老松や梅も
名高き立枝かは、松を祝ひし例には松を祝ひし例にも幾萬代の朽せぬ黄金の箱崎
の神こころ、又は春たつ千代の門松子の日の小松、行末も久しき色も變はらぬ春

毎にこれも相生の梅の花、かゝる色香も昔よりめでたし人に齢を遍く國々に靡き
従ふ此君になびき従ふ君が代の影に榮ゆる春こそ目出度けれ。

●●●●兒の行歌　抑々童兒と申するは七福神の其の中に、辨財天と申すなり、いとも
畏き粧は國を守りの御姿、戴き給ふ天冠は壽光を加護の光なり、光り〳〵明ら
けき懐き給ふ御琵琶は月日の恵み曇りなく福徳圓滿一定の其嬉しさをかげ鳴らす
妙なる弦の音曲は、福神達の一同に笑壺に入らせ給ふなり、御代の守りの誓にて
天女と顯はしまし〳〵て、大津の町や草津潟、荒津の波も靜かにて榮へ〳〵の幾
千代か千代を重ねの千代か千代の松、盡せぬ御代の松囃子、入船出船幾萬艘、唐
船も君が代の動かぬ驗し祝ふなる、碇を卸しおろしたゞ萬歳を唱ふなるえひさら
ゑびの囃子には鶴に豐かの舞納め龜も遊の音樂は殿も榮へます、國も榮へま

します、マアシ〳〵マシ〳〵。

●木挽唄（早良郡）

○山で泣く子は木挽の子ぢやろか、木挽きや子は無い、鋸屑のこ、チイドカ、バ
アドカ。

○持ちかへ〳〵〳〵持ちかへスリヤ、前の嬶の樣な嬶はない。

●同（粕屋郡）

○本挽女ン房にやなるなよ妹、花の盛りも山木屋に。

●蟲逐ひ（筑紫郡北部）

○さなぼりむしのごやぜんたーさやわ、こぬかむーしのおんともしよう、ほーい
ほーい、ほーいョ。

●博多節（博多）

○此國の名物は博多と聞え、帶にしてさへ回りよい。

○博多帶締め筑前絣、歩む姿が柳腰、お月さんが一寸出て松の影。

●新博多節（同上）

○博多沖から舟漕ぎ出だし、汐が底干で櫓が立たぬよ、チョイ〳〵。

●酒は飲むべし

○酒は飲むべし飲むなれば、日の本一の此槍をのみとるほどに、飲むなれば、是ぞ誠の黒田武士。

●梅が咲いたかの替唄

○梅は咲いたか櫻はまだかいな、柳そよ〳〵風次第。

○米は下げたが家はまだかいな、下宿屋はなか〳〵大威張、理髪やは陽氣でトチチリンシャン髭ばかり四錢取る。

○火事は止んだが雷やまだかいな、地震はゆら〳〵搖次第、爺は細氣でトチ、リシシャン、世話ばつかりしよんがいな。

●遊戯唄

○一にや橘、二にや杜若、三にや下り藤、四にや獅子牡丹な、五ついやまの千本櫻な、六つ紫鹿の子の散しな、七つ南天、八つ山吹な、九つ小梅な、十で殿御さんは御馬にお乘りんか、御駕籠にお乘りんか。

○手つんなんがふ、つんなんがふ、博多（博多又あなたともいふ）の濱までつんなんがふ。

○向ふの山にお茶摘む女郎が、十七八の嫁盛り〳〵、彼方から貰ひ、此方からも

らひ、貰ふた帶が十三七つ、一筋もろて皆戻す〳〵。

○こつけつこぼ打てば、さか手が痛む、すろでの藥や、何と服んで藥、福岡の殿の手がくすり〳〵。

○つくつくぼうさんな、なんゆう啼くか、親が無いか、子が無いか、親も御座る子も御座る、おいとし殿御を有つたれば、鷹匠にとられて今日七日、泣くかと思へば四十九日、四十九日の錢金を、どうして遣ふたらよからうか、たかい米買うて船に積む、廉い米買ふて船に積む、船は何處船、大阪船、大阪船こそ價がよけれ。

●手鞠唄（博多）

○此方の裏のちしやの木にや、雀が一羽とまつて、一羽の雀のいふ事にや、よん

べどざつた花嫁女、奥の座敷に坐らせて、金襴緞子を縫はすれば、なしやらくし〳〵泣かしやるが、親がないか子がないか、親もござれば子もござる、私が弟の千松が、まアだ七ツにやなりやせぬ、おオこかたげて鎌差いて、お馬の上から飛び下れて、いげをなんたとおつしやるが、いげは何いげしよろのいげ、しよろのいげくそ身のどくに、下の婆さんに掘つて貰らへ、下の婆さんは目がうすい、上の婆さんに掘つて貰らへ、掘つてやるこた易けれど、庭で掘れば犬が見る、なかいで掘れば人が見る、納戸の隅で掘つたれば、姉さん帷子血が付いた、血ぢやないばな博多紅、博多紅なら色よからう。

○一の木二の木三の木櫻、ごえ松柳、柳の上に、鳶がとまつて、鴉もとまつて、鴉の首がねぢれて落てゝ、お寺に申さう、お寺はかち〳〵、奥樣お駕籠、お駕籠

の下に、喧嘩がでけて、槍もて來い、棒もて來い、棒のさきやすつぼんぼん、槍の先やすつぼんぼん。

●同（福岡）

○ひでほで、よで、いつもで、姉さん友がないなら、お休みなされ、友は丹波の吉次郎樣よ、吉が土產は何々貰ろた、一に笄、二に挿櫛よ、こゝで流行らんお江戸で流行る、お江戸新町、新五郎さんの宅で、庭ぢや併搗く座敷ぢや碁打つ、中の座敷ぢや二挺三味線、引立て〳〵、さつさごべ〳〵、ごべが娘は六兵衞が貰ろた、七兵衞が媒酌、八兵衞がお客、九兵衞十兵衞が取肴、さつさごべ〳〵。

●子守唄

○ねんねこ〳〵、ねんねこよ、ねんねが守は何所へ往く、あの山越えて里へ往く

椎の山通れば、椎がばらり〳〵よ、栗の山通れば、栗がばらり〳〵よ、勝栗一つ拾ふて、勝栗カンと嚙み割つて、片つらは蟲食らひ、蟲食ひは誰さんに、よかゝた某（彌さすけの名）さんに、それ持つてねんねしない。

○金柑、蜜柑、なんぼ食べた、お寺の二階で三つ食べた、そのお寺は誰が建てた八幡長者の乙娘、おとが嫁入りする時にや、なんがい寺町シャラ〳〵と、短い寺町シャラ〳〵と、シャラ〳〵雪駄の緒が切れた、姉さんたてゝ呉れんかな、たてゝ遣ろこたやろけんど、針も無ければ絲も無い、針は針屋で買ふて遣る、絲は絲屋で買ふて遣る、針は針屋の腐れ針、絲は絲屋の腐れ絲、姉さん駄雪に血がついた、それは血ぢや無い、紅ぢやもの、大阪紅こそ色よけれ、色のよい程價が高かい。

●正月土龍打

○ジューヨワカーの(十四日)土龍打、カーユーイッパイセチイッパイ、隣のカドマデモッテイケ。

(隣のカドとは物干す爲などに廣き土間ある戸外をいふ)

●螢狩の唄

○螢來い〳〵、川の水がよいか、井戸の水がよいか、ッシャク(杓柄)持て來い、汲んでやろ。

●月の唄 (筑紫郡席田村)

○お月さまひくつ、十三七つ、七つにやあわかい、から(鈴)〳〵買ふてあげまし
よう、其から〳〵どうなつた、錢いなつてしまふた、そうの錢あどうなつた、油

かふうてあげた、そうの油あどうなつた、犬が舐つてしまふた、そうの犬なあど
うなつた、太鼓に張つてしまふた、そうの太鼓あどうなつた、あつちいどん〳〵
こつちどん〳〵たあたきや破つてしまふた。

●雜謠 其一 (筑紫郡)

何か人と爭ひして、かなはずして、逃げ出す時

○こゝまでおいらん蕊人形、蕊で造つた生人形。

何か人が打つべき樣して、打たざる時は

○お山の人形で振り上げた、ばつかり、〳〵。

お山とは山笠のことにして、山笠の人形が人を打つ樣しても、いつまでも打たざるより來たりしことなるべし。

何か意に滿たず、罵る時は。

○坊主ばつくり、山芋、煮ても燒いても、食はれん。

頭の大きものが己の氣に食はぬことある時は。

○頭百斤、尻五斤。

●同（筑前郡庫田村）

○あのひたア馬鹿だい、瓢簞だい、などうふ（生豆腐）のすひもんだい。

○泣くもんなあ口やかう、あかゞりやかう、口やかう。

●雜謠　其二

○私が友達や去年まで島田、今年や髷結ふて花嫁女。

○猫が鼠捕りや鱉や鮪ねらむ、こちのかんばさん、はらねらむ。

○來いと云ひなさりや私や何處までも、蝦夷や對島の果までも。

○私が阿父さんな川舟船頭、嘸や寒かろ川風で。

筑後國

●田植唄（三井郡）

○腰の痛さに此田の長さ、四月五月の日の長さ。

○いつも五月のさつきならよかろ、思ふ殿御の、手苗取る。

●米搗唄（同上）

○様と米搗や中トン〳〵と、米がはごつきャおもしろい。

●臼摺唄

○臼は廻さで容態ばかつくる、容態で廻ろか此の臼が。

●盆踊唄

○容貌が美いとて心が人か、大阪木偶の坊で面ばかり。
○待つが辛いか別れが憂いか、待つは樂しみ別れは辛らい。

●亥子唄（柳川）

十月亥子の晩小童五六人戯れ狂ひながら節面白く

○エイギャウ、エイサッ、ナーカノ、ヨーカノ、ヨン。

と蹴り込む又二三人手を引きつれて

○ヲバハン、エイギャウ、カ、シテ、クダハレ。

●手鞠唄（久留米）

○田螺殿、愛宕詣りはなさらぬか、可嫌で候、去年の春谷で懲りました、泥鰌殿から誘はれて、しょろ〳〵川を渡る時、鳶と鴉と鼻奴と、あちらへ蹴ころばから

かしてかひこづく、其疵が四せち四土曜冬來れば、つゝくりづゝくり〳〵と、うづきなす、何か藥は御座らぬか、藥は色々あるけれど、先づ一番の妙藥は、海のどこの勝栗と、山の峠の法螺貝と、それを練り交ぜ用ゐれば、〳〵、功能一時にあらはれる〳〵。

●新築通るなら

○新築通るなら眞中通れ、兩端ヤ狐の穴ばかり。
○新築通ひはもう止めなされ、私も出逢ひましょ咄しましよ。
○船頭可愛ヤ、皆も揃うて風呂入さき、懷中片手に立話、はやも行かうえ新築へちよいと待ちなれ私も行く。

●子守唄（三井郡）

○ごりよん聞け〳〵、旦那どんも聞けよ、守を虐待すゆヤ子に當る。

●雜謠

○お江戸通ひの殿御を持つて、結びヤ解ける樣な帶貫ろた。
○結ヤ解ける樣な帶ヤ私ヤ可嫌よ、お江戸通ひはやめなされ。
○親に隱くれて白齒を染めて、笹に降る雪葉をかくす。
○風は西風思ふ樣東、風のたよりに玉章を遣る。
○そより〳〵と吹き來る風は、樣のたよりか懷しや。
○三里柴山二里の河越えて、來るは誰故お前ゆゑ。
○所詮によんぼ（女房のこと）にヤ、もちヤなさるまい、せめてお側の下女なりと。
○お前さんから何よ云はれても、水に浮草根にやもたぬ。

○關の惣嫁が人間ならば、蝶々蜻蛉も鳥のうち。
○小石小川の鵜の鳥、見やれ、小鮒啣へて瀨を登る。
○三井寺の釣鐘下ろして雞寢せて、樣と咄がして見たい。
○去年七月盂蘭盆までは、樣の涼しい蚊帳にゐた。

豐前國

●臼摺唄

○後家よ悔むな、後家にゃ目はかけぬ、新佛の恨みがおそろしい、ヨイ〳〵。

○私の若い時は、赤糸襷、古けて古襷、ヨイ〳〵。

●盆踊唄

○連れて行かんせ何方へなりと、假令鹽屋の火を焚くとても、お前故なら苦しない。

●馬方唄

○駒は名物風吹く度に、ひんと嘶いて尾筒振る。

○馬が駿ければ馬方までも、馬が勇めばいそ〳〵と。

●月の唄

○月さんなんぼ、十三七つ、そりやまだ若いな、若い時に子を生んで、誰に抱かしよ、阿萬に抱かしよ、阿萬何所い往た、油買ひに酢買ひに、油屋の戸口で、油一升滴した、其油どうした、犬が舐つて了つた、其犬何うした、太鼓に張て了つた、其太鼓どうした、彼方の山でドン〳〵、此方の山でドン〳〵。

●手鞠唄（別府町）

○坊さん〳〵あなたの御裏に梅が三本、櫻が三本合せて六本、唐梅唐竹へで渡した。

○御正御しよんの御正月、松たてゝ竹たてゝ、子供の喜ぶ御正月、何なく嫌ひが

御みそれ（大晦日）一夜明くれば元日で、年始の御祝儀申ます、御煙草盆御茶持て來い、吸物なんだと早持て來い、一二三四五六七八九十、天から落ちたかお芋さんお芋一升がいくらかへ、廿五文で御座ります、餘り高いが高々ぼんお前の事ならまけてやる、まな板庖刀出しかけて、頭を切るのが大上手お尻を切るのが、大嫌ひ一寸一かん貸ました貸ました。

○向ひのぢやあぼんの梅の花、朝はつぼんで晝開く晩にしぼれて門に立、門に立つのは仙松か、まあだ七つにやならんとて、御馬の上から飛びおりて、腹だちや腹だちや、夫れ程御腹が立つならば、五尺の身體にやゝうけて猫が嫁入いたつが媒介、二十日鼠が五升樽さげて、裏の小道をちよこちよこ走る、何ぼ走つてもあの山越えぬ、越えぬ座當さん金だとお仰つしやる、金で御座らぬ小石で御座る、

小石よう來た上れ茶々飲めふすぼり煙草飲めとはよう云ふた。

○とんとん叩くは誰さんか、新町米屋の彌平さんあなたは何しに御出でたか、雪駄が替つてかへに來た、あなたの雪駄は何雪駄ちやんちやん坊主の赤雪駄。

○受取りた〳〵お三が盃受取つて、是からどなたに渡さうか、うち（自分）の隣りの白かべ盡しの何々さんに御渡し申しませう。

○私と御母さんと御寺に參りがけ、御寺の門から酒の糟なげて、私にやあたらんで御母さんにあたつて、お糖がぶりと申します。

●同（下毛郡中津）

○向ふ山寺、鉦や太鼓の音がする、やれ聞きたや參りたや、姉嬢の帷子貸しやらんか、姉嬢の帷子血がついて、血でもないこそ紅でこそ、紅は何所紅中津紅、中

津紅ならなほ好からう。

●子守唄

○ねんねが守は何所に行た、山を越えて里に行たア、里の土産に何よ貰うた、でん〳〵太鼓に笙の笛、笙の笛なら音が良からふ、ピッ〳〵とならせてお目に懸けう、お目に懸けう。

●雜謠

○坊主天窓に味噌擂り懸けて、蛸の泥和どでごんす。

○坊主山道、破れた衣、行きも戻りも、きにかゝる。

○書生可愛や海山越えて、花の三月は旅の空。

○私とお前は諸白手樽、中のよいのは人知らぬ。

豐後國

●方言唄（大分）

○昨日見ちエ、きふ（今日）見んしいか（見ぬ爲めか）、悔いしいに、二日と見ずばうどう（我は）どうせう。

○おれもワリウ（汝を）おむひ（思）はすれど、どうしらろ、終に逢ふ得じ、しんき何じゃり。

●豐後踊

○今まで待ちたが、雨故か、時雨故か、入ヤ〳〵、ざいざいといろや、いのいぐち後なる若衆と、急いでござれ、白菅笠に、露が立つ、皆一樣に、お習らひあひて

踊りて振りて、御目にかけよ、田舎ならひが、面白い、笠のにほひが戀となる〜〜
豐後の踊は一をどり。
○笠の下から、一目見た、一目見たさへ、面白い〜〜、ヒンヤ肌そうたら、しゆみませうか〜〜、豐後の踊は一をどり。
○西が曇れば、雨とるな〜〜、深山時雨は水となる〜〜、豐後踊は一をどり。

●盆踊唄

○くんくるべいと待つ夜は無くて、待たぬ夜は來てチヨンキリチヨンカイナ。
○金の山吹風戰ぐけんな、色はんな色はんふく茶にすんふく茶チヨンキリチヨンカイナ。

●手鞠唄（大分）

○お城のさん、お侍衆はいちよごでお駕籠で、いちよさのどん、さいたかどん、とんどゝ流行るは何の神樣、此處はしなどのさかいなどん、御吉原の吉藏さん駒藏さん、とうきて流行るは音八さん、白木屋のお駒さん才三さん、煙草の畑は一いに二、三いに四、五つに六、七に八、九の十まで返して。

●子守唄

○ねん〜〜ねんころよ、ねん〜〜お守は何處え往た、山を越えて里へ往た、里の土産は何土産、でん〜〜太鼓に笙の笛、起きたら叩かしよ、笛吹かしよ、坊やねん〜〜ねんころよ。

●遊戯唄（大分）

○こかごこかご、どの子がほしいか、中の子がほしいぞ（或は左の子肥えた等と

も云）中の子はやらん、端の子をやらう、おつともらつた（この次の句は任意に面白く謠ふなり）鯛に骨なし烏賊こそ食はせう、それでも虫の毒、ようかん三切それでも虫の毒、こうこう（澤庵の事）三切れ、それも虫の毒、金柑三つ、それも虫の毒、千兩箱三つ、それなら行かう、御姫樣の長持や何時來るか、三月櫻の咲く時分、いまさで（湯卷の事）飛んで行かう。

○一の木二の木三の木櫻、櫻の木にはちいちもとまれ、かあやもとまれ、なし（何故）そげ（そんなに）啼くか、ひもじい候、いもじけりや田に行け、どぢよとつて食へ、足が汚る候、流れ川で洗へ、流るゝ候、けず（からたち）の木にとまれ、足を切る候、紙持てくびれ、ほめく候、ほどいて冷やせ、蠅がむしる候、其蠅殺せ罪なる候、御寺に參れ、傘がない候、借つて參れ候、錢がない候、取つて參れ候

ぬしどになる候（斯く次から次と謠ふて行く）

○かんかん盡しを云はうなら、蜜柑金柑酒のかん、小供にようかんやりや泣かん親のせつかん子が聞かん。

○つるてんつるてんはぎはらてん、破れた前垂あててんてん、夏は寒天心太、島島辨天手を拍ちや合點、一天合點中六天、それで私のもとでこてん。

○大黑さんと云ふ人は、唐から日本に渡りがけ、一で俵を踏ん張つて、二でにつこり笑つて、三で盃頂いて、四つ世の中よい樣に、五つ出雲の神樣で、六つむこさんもらうて、七つ何事無い樣に、八つ屋敷を買ひ擴め、九つ此處に土藏建て、十でとうとう鎭まつた。

肥前國

●麥搗唄

○揃ふたなア、揃たはの、杵が三挺揃ふた、秋のなア、出穂より、ほんにまだ揃た。

○爰の仲間に唄はぬ人は、胸に如何程世話がある、世話があるはの、私が身の中にやナア、腹にやなア、三月のヨイ〳〵、子がござるナア、三月ナア、四月まぢや袖でも隱すナア、最早ナア、七月ヤ顯はれ月よナア、どつちも日雇取り、互に輕うヤレ。

●籾摺唄

○唐臼廻れ〳〵よう、日和見て廻れよう、明日はヨイ〳〵、前田の稻を刈アる、稻を刈るなら、西を見て刈られ、西の暗いは雨となる、ア、ゴンスレ〳〵。

●祝唄（南高來郡）

○これの座敷は、祝ひの座敷、黃金まざりの、雨が、鴉ぢやなけれどがくがあゝ降る。

●船唄（同上）

○鳥も通はぬ八丈が島を、通ふ我身は厭はねど、後に殘りし嬶や子は、どうして月日を暮すやら。

●馬方唄

○矢上書出しや謀早留る、明日は多良越濱止まる。

○かす毛駒追ふて六藏は來んか、六藏こそ來れ、鈴鹿の坂を。

●盆踊唄

○平戸小瀬戸から船が三艘見ゆる、丸にヤの字の帆が見ゆる、サヨイヤナア。

○げんが弟はやアし、すなぢのごんぼねそこはらすてあらはさるゲンコベ。

●唐人踊（文政年間流行）

○我的吓感郎的、呀々有、呀吓呀々有、看看吓、送奴個九連環、九吓、九連環、雙手拿來解不開、奴把刀兒割々不斷了、呀々有々。

我的は我にて的は助字なり、吓は節なり、感は感心といふまでにて耶的は思ふ男をいふ、其男の心や容色を感心して見惚れて居たれば男の方より智惡の輪解て見よとて贈れり、之を兩の手して持ち歸り、解けども解けども　解けず、小刀をもて切解かんとすれども愈々切離れねといひて二人が中の離れ難きにたとへたり、九連環は智惡の輪なり、又呀々有々とは曲を助くる章句にして別に意なし。

○誰人吓解奴的九連環、九吓九連環、奴就與他做夫妻他們是個男々子漢了呀々有々。

前章の其二なり、誰かこの智惡の輪を解き得べき、もし解く人もあるならば、我は思ふ男を捨てゝ外の男と夫婦となるべしといひて、誰が解きても解けぬ心を厚くいふなり。

●手毬唄（長崎市）

○トン〳〵〳〵トンと長崎磨尾町の、花の樣なる權三と云ふて、都育ちのやすゝり姿、上にのぼせて手習させて、寺が不調法で賭博を打つて、賭博うち〳〵打負かされて、高い椽から突き落されて、楊枝鼻紙誰が〳〵取つた、畠ちよんねんどんの乙娘、親に三貫子に四貫、增して婆さん四十五貫、四十五貫の錢金は、安い

米買つて船に積む、さッさ押せ〳〵大阪まで、大阪土産は何々よ、一に香箱二に鏡、三で薩摩の板買つて、板屋葺して門建てゝ、門の四圍を廻つて見れば、四國坊主や道樂坊主、家の娘を盗んで逃げた、肥後の薩摩の端まで逃げた、娘泣ぐな一度。

●同（伊萬里）

○八幡太郎が袴を穿く時は、助けて下され高野山、高野のお方は知らね共、昨宵貰ふた花嫁御、奥の座敷に坐はらせて、金襴緞子を縫はせたら、ほろり〳〵とお泣きやる、何の悲みあらうか、私が弟千松は、七ッ八ッから金掘に、金を掘らずに死にました、一年待つても未だ見えず、二年待つても未だ見えず、三年三月に狀が來た、狀の表書讀んで見よ、德庄に來いと云ふて來た德庄は何着て行かりよ

か、一重木綿長小袖、上から越後の帷子、帶は博多の三重まはる、シッカと締たら四重廻る、足袋は白足袋、京雪駄、馬は白馬飾り馬、シャンコ〳〵と行く時はあとから日暮の雨が降る、さきにはちら〳〵雪が降る、牡丹芍藥罌粟の花、一枝折りては髮に挿す、二枝折りては腰に挿す、三枝折りては日が暮れる、弟の宿に泊らうか、姉の宿に泊まつて、一番鷄から立起きて、かねの茶碗に水汲んで、一ばんあがりの御茶屋さん、二ばんあがりの酒屋さん、三ばんあがりの盃さん、酒の肴は何よかん、江戸の金柑、江戸の茄子。

●同（松浦郡濱崎地方）

○お天とさア、お天と一チさま、じやうせんど、あかせの、こまくり、あげて、一百ばいえこせ。

右の歌を繰かへし唄ふ。

●子守唄

○ねんねが守は何所往た、あの山越えて里へ往た、里の土産は何々か、簞笥に長持、挾箱、挾箱こしらへてやらるもね、いこ(歸)でも、く(來)でとも云はつしやるなや。

●螢々（長崎市）

○螢々、池の水を飲むなよ、飲むなら柄杓とタンゴと持て來い。

●お月さん（南高來郡）

○お月さん〳〵、何爲出らッさん、十五夜さんから憎まれて、其所から星や出らッさん、後に居るは誰よ。

●草履隱し（同上）

○草履かん隱しかん、かたらんものは、いーヤ〳〵龜の子、紅つけ紅つけ揃ふた

●雜謠

○籔の中のきち〳〵坊主は、なじよと泣くぞ、親が無いか、子が無いか、親も子もござるけれども、叔母御の方へ帷子一枚借りに往た。

○献せば押へる、押へば呑めず、呑めば其身の仇となる。

○釣鐘おろして鷄伏せて、樣と話がして見たい。

○磯の鮑を九つ集め、ほんに苦界の片思ひ。

○指を切らうと云ふたは嘘よ、金が無いなりや手を切らう。

○好きな殿御と夏吹く風は、明けて入れたい蚊帳の内。

○論語讀む〜廊に通ふ、女郎も格子の内ぢやもの。
○雨の夜に日本近く夜ふけて走り込む、唐の舟、黒舟に乗り込む八百人、大筒小筒をどんどと撃ち立てる、羅紗猩々緋のスッポノトッポ着て、黒人は舟底に仕事する、大小人な、ひやにかまへて海を見る、亞米利加さしてさつさと走り込む。
○嫁御持たらば多比良から持ちやれ、多比良土産にや蟹貰ふ。

肥後國

●田植歌

○腰の痛さよ、この田の長さ、四月五月の日の長さ。
○盆の牡丹餅ヤ三日置きや腐さる、おばゝこれ見や毛がはへた。

●盆踊唄

○盆なはつてかす子供がもぞや、子供なげくなまだござる。
○だんだら提灯燈した、狐の嫁入鼬の仲立、サッサラホウ〜。

●婚禮唄（玉名郡荒尾）

○親はどんなもの、しら茶にまよふてノシコレしらぬ旅路に娘遣るヨカロカノシ

コレよつなかばつてん、どうしよにコッポヨカ〳〵。
○姑は無理なもの、石で袴を縫へといふ、石で袴を縫はれるならば、山の葛が糸となるヨカロカノシコレよつなかばつてん、どうしよにコッポヨカ〳〵。

●手鞠唄（熊本）

○向へのザボンな梅の花、朝蕾んで晝開く、晩は凋れて門に立つ、門に立つ松ア何松か、千松か萬松か、まだ七つにならぬさき、御馬の上から飛び下りて、具足の袂に矢を受けて、姉から買ふた使者刀、弟から貰ふた笙の笛、姉御の御室に置たらば、繼母さんから探されて、大腹立や小腹立つ、それ程お腹が立つならば、紙と硯と引寄せて、思ふ事を書き附けて、紫川に流して見れば、浮ては沈み浮ては沈み、アラ面白の浮草や〳〵。

○向への小寺は誰が建てた、八幡長者の乙娘、アラ〳〵ようこそ建てられた、棟には法華經誦み揃へ、足は黒金轡金、人の通らぬ山道を、通れ〳〵と責られて、否かならずに通つたら、元の殿子に行逢ふて、御暇下され左門様、御暇遣るのは易けれど、己等の女房になるならば、白足袋紺足木袋綿足袋〳〵。
○おと乙女のや、二十二十めのや、三十三十めのや、四十四十めのや、五十五十めのや（これより百百めのや　など順次に算ふる也）百で上つた大さん小さん、汝の御庭に梨が三本、柿が三本、合せて六本、ひこほねや、たこほねや、ヒーホー一つき。
○請取ました〳〵、大々大事の御手鞠様よ、金の御服紗に御包み上げて、島原は聞て極樂見て名所、名所〳〵の鼻の高さが一尺五寸、あれよあなたの御袖の御下に御渡し申します〳〵。

○向ふ通るは醫者ではないか、醫者ではあれど藥箱もたぬ、藥のまうより死んだがましよ、死ねば野原の土となる茅となる。

○向へのお爺さんは妙な事仰やる、狸の皮見て褌だと仰る、褌にも毛がありや、たまにも毛がある、毛と毛で合せて毛でござる。

●子守唄

○ねんね兒よ、ねんね兒よ、ねんねこかつちり龜の子龜は盗人がおつとつた(盗まれた)

板ぎれ叩いてねんね子よ、ねんね子よ。

●動物唄

○ほーほー螢來い、谷川の水呉れう、小柄杓持つて來い、汲んでやる。

○酒屋の蝙蝠酒呑ませう、燒酎呑むかい酒のむかい、もちつと下ればまたのませう。

●ポンポコ節

○花の熊本長六橋から眺むれば、おヤポンポコにヤ、下は白川定芝居、少し下つて本山渡し舟。

○オ、イオ、イト追ひかけて、おヤポンポコにヤ、縞の財布の五十兩、天の罰かなほんまの二ッ玉。

●雜謠

○傘を忘れた兎田の茶屋でドッコイ空が曇れば思ひ出す。

○待つがつらいか別れがういか、待つは樂しみ別れはつらい。

○大金持のもつちり茂右衛門どん、いーわしゃ買はんかい(鰯は買はぬか)買ひばしきるぞう。

と（買ひもきらぬに）何とか云はりゆかな。
○山にきらきら光るは何だいな、月か星かよ樣の松明か。
○晝の屁がいひだし屁、夜の屁が默まり屁。

日向國

●田植唄

○飫肥の殿樣、清武泊り、みだれ桶かよ、おび戀し。
○さんざ振れ〳〵三尺袖を、着せて振らせて、見て御座る。

●子守唄

○ねんねこ〳〵寢いヤの、ねんねのお守は何處行いた、お山を越えて里に行た、
お里のみやぎヤ（土產）なん〳〵かん、デン〳〵太鼓に御所の笛、南無阿彌陀佛〳〵

●月の唄

○お月さん何程、十三七ッ、まだ年は若いど、油買ひに酢買ひに、油屋の角で、

滑つて轉んで、油五合うして〻、其油どうした、次郎どんの犬と、太郎どんの犬と、ひん舐つてしもた、其犬どうした、打殺して皮剝いてしもた、其皮どうした太鼓に張つてしもた、其太鼓どうした、あつちの宮にトロスコトン、こつちの宮にトロスロトン。

●盆踊唄

○水に蛙の鳴く聲聞けば、過ぎし昔が思はるゝ。

○月はいみじき闇こそよけれ、忍ぶ姿の顏見えず。

●手鞠唄

○昨夕惠比壽講に呼ばれて行たら、鯛の吸物、鯨の燒物、一杯おすゝろすゝろ、二杯おすゝろすゝろ、三杯おすゝろすゝろ。

●雜謠

○故郷戀しや我が故郷の、柴の庵が懷かしや。

○夫の留守に人寄せらぬは、さても見上げた花嫁子。

○思ひ焦れて飛ぶ螢、ゆふべ〳〵に身を焦す。

大隅國

●盆踊唄

○幾夜明日の浦こぐ船も、浮かれ焦がれて磯へ寄る。
○思ひ出せとは忘るゝからよ、思ひ出さずに忘れまい。

●國分煙草

○花は霧島、煙草は國分、燃えて上るは櫻島。

●謠謠

○樣と別れて松原行けば、松の露やら涙やら。
○竹に雀は品よいけれど、末は烏の餌さし竿。

○淺い川ぢやと小褄をからげ、深くなるほど褄を解く。

薩摩國

●方言唄

○おはんな（あなたは）そげん（そんなに）ぎアんすどん（仰しやるけれども）そら（それは）そぢや（そうでは）ごあはん（ございません）ふとの（人の）ないよきて（噂を聞て）ぎアやめすな（おつしやいますな）。

○ぢご（稚兒）たちよ、こけ（此處へ）きちエみやい（來て見やれ）櫻島の、づたんばらから（腹の所から）月がはつぢえた（月が出た）。

○だいてろさん（誰某さんのと）だいてろさんは（誰某さんは）きョでいぶんぢや（兄弟分ぢは）げあはんかせんか（御座いませんか）いやそぢやごあはんと（否左樣では御座いませんが）なぜそげん（なぜそんなに）ゆいもすか（言ひますか）にちよいもすげん（似て居りますから）ゆいもしたが（言ひましたが）。

●疱瘡踊

○かうだい町のとんかめ女、疱瘡も輕るい、あんなよいこんなよい、かるいぞかるいぞ〜〜。

●手鞠唄（鹿兒島）

○だんちの〜〜お手鞠樣の、海の、ふくさと、むしのふくさと包み合はせてだあり樣（だれ〜〜）樣も、いつも遊びどうしの花の口口樣に渡たした。

●新納武藏守作の數へ謠

一トヤ、肥後の加藤が來るならば、煙硝さかなに團子會釋、それでもきかずに來るならば、首に刀を引出物。

二トヤ、深きてだては胸の中、敵にもらすな此事を、味方〜〜の陣所には、合圖

定めて、つけよ火を。
三トヤ、御國の人は殘りなく、鎧甲を備へつゝ、スハヤと云はゞ其儘に、陣所陣所に馳せ給へ。
四トヤ、夜討と敵がかくるなら眞弓鐵砲を構へつゝ、大將と見えし人々を、狙ひすまして射り落せ。
五トヤ、何時もかはらぬ加藤奴が片穗の鎗で來るならば、鎌や鉞、研ぎたてゝ、もろかゑ共に打落せ。
六トヤ、昔の人もあざむける、薩摩荒武者このたびは、思ひきはめし事なれば、岩も黃金も一くだき。
七トヤ、なか〳〵そちも退屈よ、氣をばきかせて引きとれや、如何に必死と極め

ても、薩摩武者には勝やせぬ。
八トヤ、屋敷〳〵の隅々を、さがし求めて敵方の、間者居りなば其まゝに、繩や綱にて縛り置け。
九トヤ、こゝの處は大口よ肥後の多勢をやす〳〵と只一口に引き入れて、口の中にて慶殺し。
十トヤ、とがなき敵を法もなく、殺さば後の罪つくり、よはき加藤を其儘に、いざや仁愛加へ置け。

●雜謠　其一

○銀のかんざし、伊達にはさゝぬ、島田くづしのとめにさす。
○稚兒の前髮、さらんすならば、わしも切りましよ、振袖を。

○酒さへ飲めば、身ははだかでも、おほめさんとめ、着た心ち。
○洲山おとめ女は洲山の狐、尾振り尻振り人を振る。
○闇夜なれども忍ばゞ忍べ、伽羅の香を知るべにて。
○散り行く花に寐に歸る、再び花が咲くぢやない。

●雜謠　其二　（櫻島）

○櫻島見て、靡びかぬ人は、枝垂柳で、もてかへる。
○櫻島には、へ（蠅のと）がふりまはる、しかと煙草は、一寸しました。
○島におじやるなら、鞋穿いておじやれ、島は石原小石原。
○島にゃ一度渡らにやならぬ、植ゑた木もある樣もある。
○島の權現結ぶの神よ、三度參れば妻たもる。

又もおじやんせ此の松浦村に、波は立つとも名は立たぬ。

●盆踊唄

〜團七どんの、さらに小麥六把許しまふた、裏のおかめ女と、ざ

●子守唄

んどん〜しよんどんよ、ねんねこんぼう、とこさんせ、あしたは早やう

んせ、いし〜おかちん、ついておこ、ねんね〜ねんねよ、おう〜お

〜よ。

對馬國

●盆踊唄

○いざや若い衆ござるまいか、よひる狐なんの化さうよ、とんとう化けよ。

○要らぬ煙草の羅宇が長うて、樣と話す夜の短かさよ。

●雜謠

○文を片手に目に溜め涙、月を詠めて思案顏。

○兎角邪見は風ゆゑ波も、船に思はぬ氣がねする。

○櫛はとれ共心のもつれ、云ふにいはれぬもつれ髮。

○對州立が嶺、御番所がなけりや、連て行こぞや長崎へ。

琉球

●方言唄（那覇）

○けふの福らしや、竹もが、なたちよる（喩）、つぶて（苔）居る花、露ぎやあたくと（行遇ふ）

●くどき唄（同上）

上りくどき

〇旅の出立觀音堂千手觀音伏し拜み、こがね酌取つて立ち別れ、袖に振る露押し拂と、大道松原歩み行けば弓矢八幡崇源寺、新築地高橋打ち渡り袖を列ねて諸人の行くも歸るも中の橋、沖の側迄親子兄弟伴れて別るゝ旅衣、袖と袖との露涙、

船の纜とくとくと、船子勇みて眞帆引けば、風や正面に午未、復回り逢ふ御縁として拓く扇や三重城斬波岬を後になし、伊江屋戸立波おしはらひ道の島々見渡せば七島沖中や灘易く、立る烟や硫黄島佐多岬にはいならでエイあれに見ゆるは御海門、富士に見まがう櫻島。

下りくどき

〇さても旅寢の假枕夢の覺たる心地して、昨日や今日やと思へども、早く九十日なりぬれば、いざや御暇下されて、使者の面々皆揃ふて辨才天堂を伏拜む、やがて御狩や立出でゝ多勢の人々皆揃ふて御屋の濱にて立別る、名殘り惜げに船子共喜び勇んで帆を揚げぬ、呼びの杯廻るまに、山川港にはいりて、船の檢査濟んで又錨引上げ帆をあげぬ、波路遙かに眺むれば、後や先なる共船の帆を引きつれて

走り行く、七島途中や灘やすく、道の島々見渡せば、斬波岬を後になし、あれわれ拜め御城え、辨の御嶽を打過ぎぬェー袖を列ねて諸人の向に出たや三重城。

四季くどき

○偖ても目出度や新玉の・春は心も若か反り、四方の山邊の花盛り、長閑なる世の春を告げ來る谷の鶯は〳〵。

○夏は岩間を傳へ來て、瀧津麓に立ち寄れば、熱さ忘れて面白や、風も涼しく袖に通ひて夏も餘所なる山の下陰ハ、〳〵。

○秋は尾花が打招く、園の籬に咲く菊の、花の色々珍しや、錦沙羅紗と思ふばかりの秋の野原や千草色めくハ、〳〵。

○冬は霰の音添ひて、軒端の梅の咲花は、色香も深く見えあかぬ、花か雪かと雪で見分けん雪の降る枝に咲くや此花ハラ〳〵。

●祝儀唄

○けンの（稀有なり）ほこらしやや（有なり）なほれかな（猶これ有るや）たてろ（彩色の貝）つぼであるはなの（花の）つかまやたごと（露を帯たるが如しとなり）

この歌は始め終りに唄ふより、高砂の謡を唄ふが如し、さて酒もりながばに二人にてうたふ謡歌

○九重のさちに苔て露まちよ、うれしも菊の花やゆる、常盤なる松のかはるもなき、まいつもすこりはいるぞまさる。

○嬉れしさよ唐の竹の節々に、君が萬代の齡こめて、むかしうらめたろん、あかつきのとりん、今としにならすしらなあなや。

○月や昔、（さやすが、かはてゆつやひと心。

○月日重なふば、年やよるれども、ゑりなけけるいそく旅の空よ。
○旅やはまぎとり、草枕心寝ても忘られんそかおそは。

●妓謠

藝妓、蛇線を彈きて唄ふ、其歌の二三を記さんに、

○ちごのもん（君が思ふ男の門）にたつれば、ばびう（子の）の樣なつの蟲（蜂）がどたま（あたま）つぢよけん（ゆびげ）をちよいとはね、ホンダエ〜。
○ふゞくのべく（神の社のあたりなり）にものとへば、びうがのそ（人に忍んで）に、ふんでんた（忍びある）こと）さりもよいきやアめつたにおざご（神前に米をまくこと）まくホンダエ〜。
○しろばり（雪の）がさわぐ（騒るなり）のに、あかきんぼう（紅酒にてあかき酒）に、へろまりたふ）ういがねばこ（わがれどころ）でひろまれやホンダエ〜。

臺灣

●土蕃新年の唄

○ヤキ、オハ、マンニヤック、イソ、グワラ、マク、、オハ、マンニヤック。

同譯「我が祖父よ來り饗けよ、汝等の輩よ、杖つきつ、來り饗けよ、」

○蕃人の歌（意譯）

●蓬山八社の情歌

夜間遙かに　獨寢て居て　眠られぬ
怪しの鳥の　鳴聲す　戀しき人の　訪ならん
起出て見れば　左はなくて　無情の風が　竹を吹く